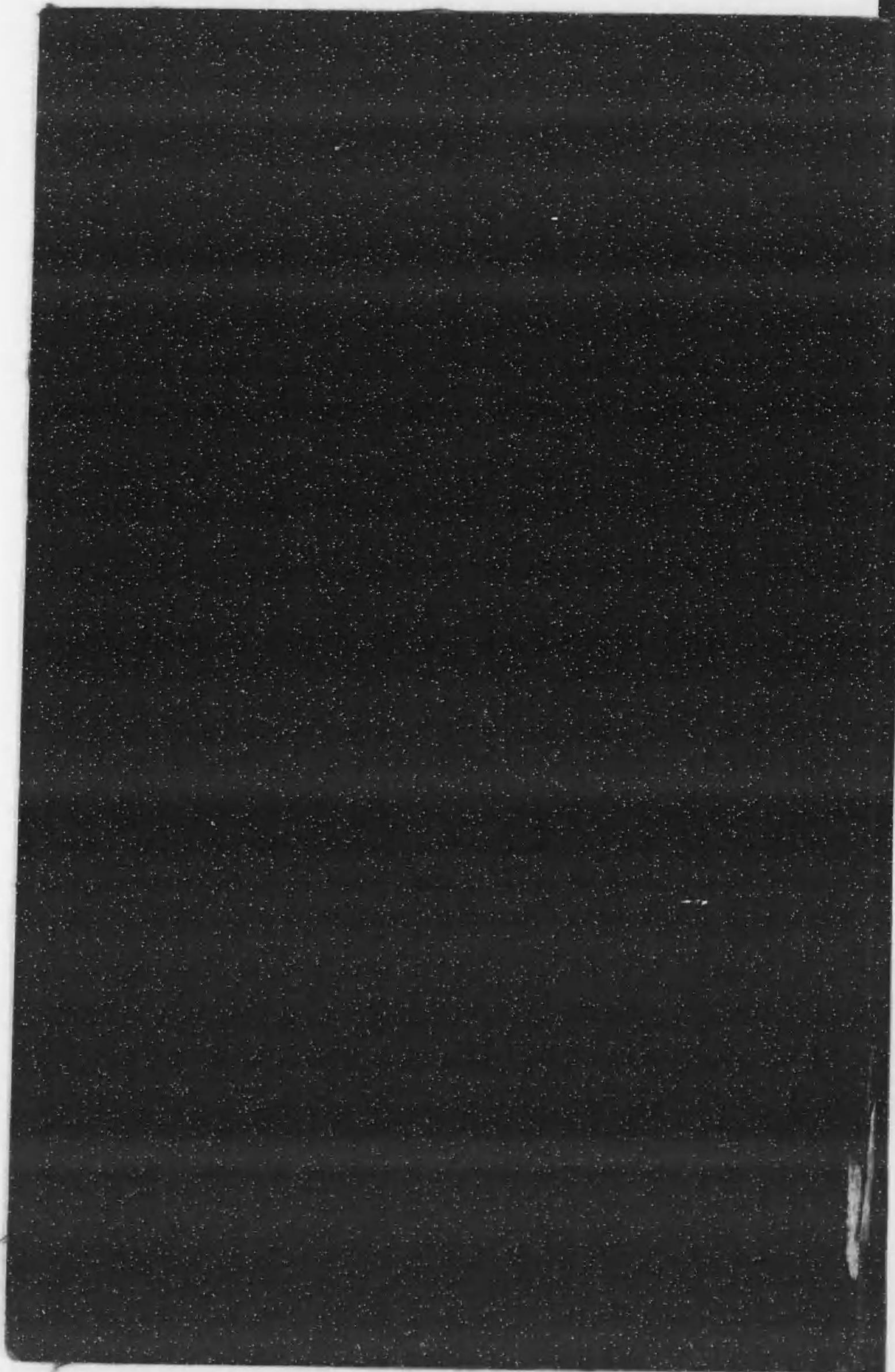


始



出口瑞月口述

靈界
物語
海洋萬里

卯の巻



西王瑞之口練

〔界物語第二十八章〕

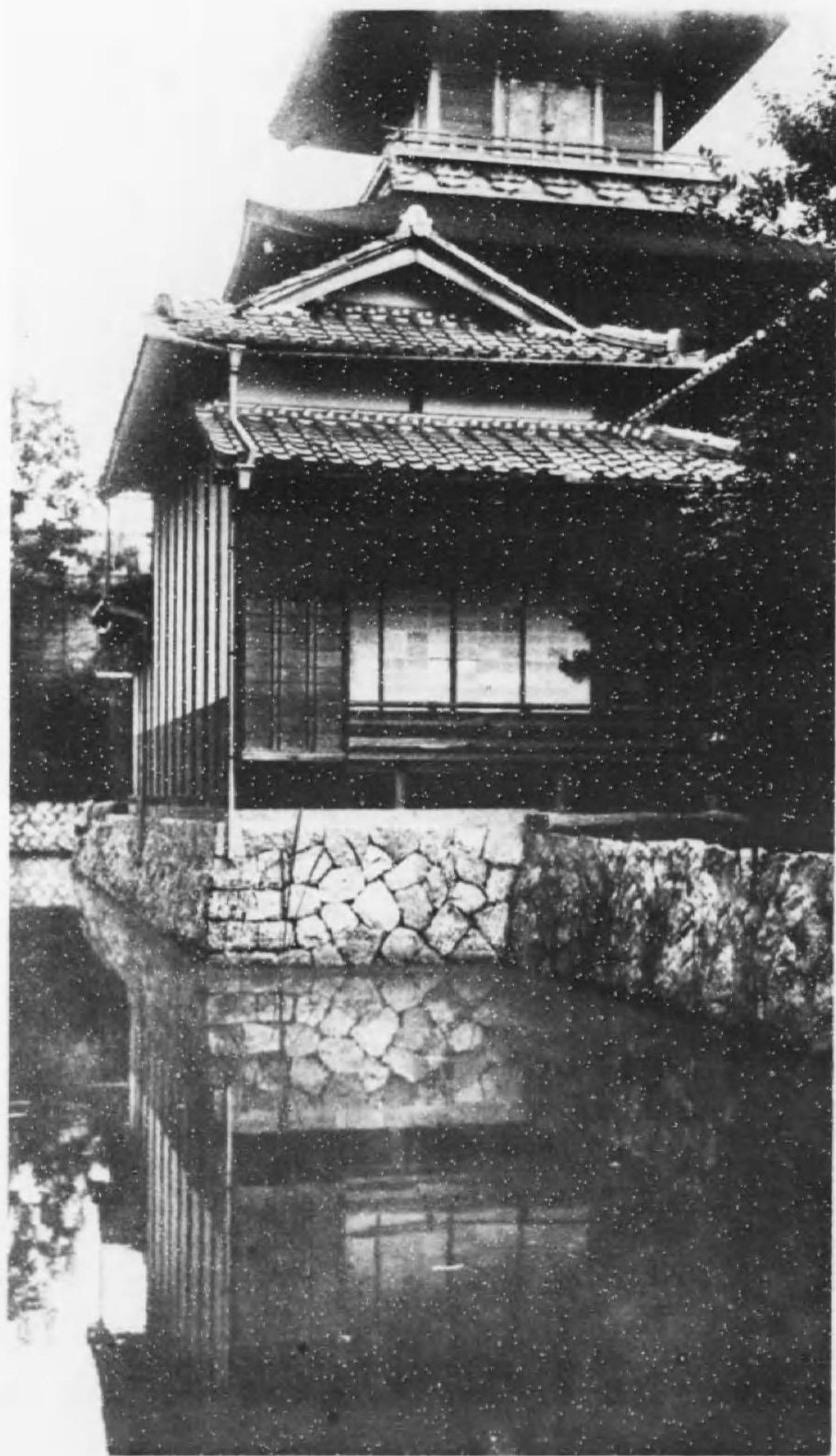
萬里

天青社發行





1083034



将501
123.

序
歌

月光いよ／＼世に出で、

精神界の王國は

東の國に開かれぬ

眞理の太陽晃々

輝き渡り永遠に

盡きぬ生命の眞清水は

下津岩根に溢れつゝ

慈愛の雨は降りそゞぐ

莊嚴無比の光明は

世人の身魂を照らすべく

現はれ坐せり人々よ

一日も早く目を覺ませ

四方の國より聞ね來る

誠の神の聲を聞け

靈の清水に渴く人

瑞の御魂に潤へよ。

序
歌

序 歌

二

大正十一年八月十日(舊六月十八日)

於龍宮館 口述者識

海洋萬里 [卯の巻] 目次

序	文	頁
總	說

第一篇 高砂の島

第一章	カールス王	五
第二章	無理槍	二一
第三章	玉藻山	四一
第四章	淡溪の流	五九
第五章	難有迷惑	六九
第六章	麻の紊れ	八四
目次			一

第二篇 暗黒の叫

第七章 無痛の腹……………九七

第八章 混亂戦……………一一四

第九章 當推量……………一二六

第一〇章 纏れ髪……………一三六

第十一章 木茄子……………一五一

第十二章 サワラの都……………一六八

第三篇 光明の魁

第十三章 啞の對面……………一八七

第十四章 二男三女……………一九八

第十五章 願望成就……………二一八

第十六章 盲龜の浮木……………二三七

第四篇 南米探險

第十七章 誠の告白……………二五五

第十八章 天下泰平……………二七二

第十九章 高嶋丸……………二九一

第二〇章 鉦理窟……………三〇七

第二十一章 喰わぬ女……………三二四

第二十二章 高砂上陸……………三四〇

跋……………三五四

海洋萬里(卯の卷)目次終

海洋萬里【卯の巻】 [28]

口述者 出口瑞月

筆錄者 松村眞澄

總說歌

三千世界の人類や

禽獸虫魚に至る迄

救ひの舟を差向けて

誠の道を救へ行く

神幽現の救世主

太白星の東天に

きらめく如く現はれぬ

一切萬事救世の

誠の智慧を胎藏し

世間の所在智者學者

總說歌

權威と智慧に超越し	迫害苦痛を一身に
甘受し世界を助け行く	歡喜と平和を永遠に
森羅萬象に供給し	至幸至福の神惠の
精神上の王國を	斯士の上に建設し
無限の仁慈を経となし	無窮の智識を緯として
小人弱者の耳に克く	理解し易き明教を
徹底的に唱導し	如何なる惡魔も言靈の
威力に言向け和しつゝ	寄せ來る悲哀と災厄を
少しも心に掛けずして	所信を飽く迄貫徹し
裁、制、斷、割、道極め	神人和合の境に立ち

惡魔の敵に遇ふ毎に	益々心は堅實に
信仰熱度を日に加へ	三千世界に共通の
眞の文明を完成し	世界雜多の宗教や
凡ての教義を統一し	崇高至上の道徳を
不言實行體現し	暗黒無道の社會をば
神の教と神力に	照破し盡し天津日の
光を四方に輝かす	マイトレーヤの神業に
奉仕するこそ世を救ふ	大眞人の神務なれ
ア、惟神々々	御靈幸はひましましてよ。

大正十一年八月十日(舊六月十八日)

於龍宮館

口

述

者

識

總
說
歌

四

第
一
篇
高
砂
の
島
(141)

第一章 カールス王（ハ〇二）

千早振る遠き神代の其音

國治立大神は

豊葦原の瑞穂國を

堅野常磐に治めむと

心を盡し身を盡し

綾と錦の機を織る

其糸口の龍世姫

永遠に鎮まる此島は

神の御稜威も高砂島の

胞衣となり出でし臺灣島

清く正しき眞道彦の

神の子孫は今も猶

榮わくして新高の

山のあなたの神聖地

清鮮の波を湛へし日月潭の

湖面を見下す玉藻山

カールス王

國治立大神や

瑞の御靈の神靈を

齋き祀りて高砂の

島の老若男女をば

三五教の大道に

導き救ふぞ健氣なる。

全島第一の大高山、新高山の北麓に花森彦命の子孫、カールス王の鎮まる都が古くより建設されて居た。

花森彦命の子にアークス、エーリスの二人があつた。兄のアークスは花森彦の後を襲うて國王となり、アークス姫と夫婦の間にカールス王を生んだ。弟のエーリス夫婦の間に生れたるをヤーチン姫と云ふ。ヤーチン姫は性質温厚篤實にして、容色衆に優れ、高砂島の花と謳はれ、將來はカールス王の後たるべしと自らも信じ、國人も之を認めて居た。カールス王も亦ヤーチン姫の我妃となるべき者たることを、堅く心中に

期待して居た。

時に高國別、玉手姫の間に生れたるサアルポース、ホーロケースの二人の、心善からざる兄弟があつた。玉手姫は惡神の化神たりし事は、「靈主體從」貢の巻の物語に於て示したる通りである。其水火より生れたるサアルポース、ホーロケースの二人の心魂は恰も猛獸毒蛇の如く、アークス王の部下に仕へて暴政を全島に布き、民の怨恨を買ひ、國家は益々擾亂紛糾して收拾す可らざる情勢となつて居た。

然るにアークス王は或時新高山の淡溪に清遊を試みたる際、玉手姫の怨靈に憑依されて、誤つて溪流に陥り上天した。茲に於て其子カールス王をして其後を繼がしむる事となつた。就てはエーリスの娘ヤーチン姫を容れて妃となさんと、數多の群臣は全力を盡して奔走して居た。

然るにアークス王の上天後はサールボース、ホーロケースの勢益々烈しく、あわよくばカールス王を排除し自ら其位地に直らんと、計畫して居た。サアルボース、ホーロケースの勢力は旭日昇天の如く、カールス王を殆ど眼中に置かざるの概があつた。されど天使花森彦命の子孫たるカールス王を排除するは、國民全体の反感を買ひ、暴虐無道の譏を受けんことを恐れて、表面はカールス王の臣となり、之を敬遠して居た。カールス王は唯單に名義を存するのみ。其宮殿も其生活もサアルボース兄弟に比べて、實に比較にもならぬ程の質素であつた。

時にカールス王の従妹に當るヤーチン姫を妃となす事は、國民一般の熱望する所であり、且つアークス王の舊臣は残らず此婚儀の成立を希望した居た。サアルボースは自分の娘セールス姫を王妃となし、ヤーチン姫を何とてかして卻け、自らカールス王の外

戚となりて、完全に政權を左右せん事を企畫してゐたのである。ヤーチン姫の身邊の危愆、實に風前の灯火であつた。

アークス王の上天後は其長子カールス王を立て、萬機を總裁せしむる事とし、ヤーチン姫を一日も早く王妃の位地に据ゑんことを謀り、別殿を造り、ヤーチン姫にユリコ姫を従へ、キールスタンをしてヤーチン姫の守護職となさしめた。然るにヤーチン姫は新造の館に移りてより、俄に急病を發し苦惱甚しく、呻吟の聲遠近に聞ゆる計りであつた。

サアルボースの娘セールス姫はマリヤス姫を従へてヤーチン姫の病床を見舞うた。ヤーチン姫はセールス姫を見るより忽ち目を釣り上げ髪を逆立て、恰も狂亂の如く荒れ狂ひ、セールス姫に飛び掛つて、矢庭に髪を掴み、瘦こけたる病軀をも顧みず、室内

を引摺り廻し

ヤーチン姫「汝は我れを惱ます金狐の邪神、一刻も早く此場を立去れッ」

と喚き狂ふのであつた。キールスタンはヤーチン姫の荒れ狂ふを背後より抱きとめ、且キールス姫に對し言葉を低うして、其無禮を謝し、從臣のホールをしてキールス姫主従をサアルボースの館へ送り歸らしめた。

キールス姫の立歸りし後のヤーチン姫は精神稍鎮靜したと見れて、スヤ／＼と眠に就いた。されど時々「玉手姫々々々」と連呼し、其度毎に發熱苦悶の狀益々烈しく、身体の内は日に削るが如く瘦衰へ、見る影もなき状態に陥つた。

此時カールス王はヤーチン姫の重病を聞き、病床を見舞ふべく、テールレンス、ハルマーズの重臣を従へヤーチン姫の館に到り、瘦衰へて見る影もなき姫の姿に呆れ果て

日頃の戀愛の心も漸く薄らいで來た。されどキールスの娘にして、切つても切れぬ從妹の間柄、如何にもしてヤーチン姫の病氣を回復せしめ、元の美はしき容貌となつて我妃となし、永く偕老同穴を契らんと心の奥深く希求して居た。テールレンス、ハルマーズは一生懸命淡溪の畔に出で、水垢離を取り、ヤーチン姫の病氣全快を祈願した。ユリコ姫はヤーチン姫の枕頭に侍し、看護に餘念なかりし折しも、夜中堅き戸締りを風の如くに押開けて入り來る一人の美人、數多の侍女を伴ひ、此場に現はれ、眉間より金色の光を放ち、ユリコ姫に向つて言ふ

美人「妾は新高山を守護致す高照姫命である。ヤーチン姫の病氣危篤を聞きて、座視するに忍びず、姫が生命を救はんものと、起死回生の藥を持參したり。一刻も早く之を飲ませよ」

と言ひつゝ、紫色の木瓜をユリコ姫に與へ、烟の如くに立去つて了つた。ユリコ姫は合點行かず、木瓜の一部を割いて狎の子に與へた。狎は尻を振り頭を振り、一口に呑み込みしと思ふ間もなく、忽ち室内を前後左右に狂ひまはり、七轉八倒、黒血を吐き悲鳴をあけて其場に殞れた。

ユリコ姫「今の女神は如何なる魔神なりしか。ヤーチン姫様を毒殺せんと企みたるセールス姫の間者ならぬ」

且つは驚き、且つは怒り、直に新高山の南方に立昇る雲氣を目標に、汗みぎろになつて祈願をこらした。忽ち身体動搖して歸神となり、今の高照姫と稱する女神は、金狐の化身にして、セールス姫の副守護神なることを口走り、初めて女神の正体を感知した。ヤーチン姫は衰弱甚しく、殆ど虫の息となつて居た。キールスタンは此場に

慌だしく走せ來り

キールスタンは「ユリコ姫さん、姫様には御異状は御座りませぬか。只今此館より怪しき光現はれしと見る間に、惡狐の姿現はれ、暗に紛れて山上高く駈去りました。私は之を見るより取る物も取敢ず、姫の身邊に異状なきやと、急ぎ御伺ひに参りまして御座います」

ユリコ姫「ハイ、あなたの御推量にたがはず、怪しき女が突然現はれ、姫様の病氣本復致す様に此木瓜を與へよと渡して、直様立歸りました。どうも腑に落ちませぬので、狎の子に木瓜の一片を切り取り與ふれば、狎は忽ち苦悶の結果、黒血を吐いて斃れまして御座います」

キールスタンは「油断のならぬ惡神の仕業……すべて臺灣島は高砂島の胞衣と昔の神代より定め

られ、龍世姫命國魂神として、御守護遊ばす以上は、龍世姫命を町重に奉齋し敬神の大道を再興致し候はば、妖怪變化の災は、忽ち拂拭する事で御座りませう、アークス王の不慮の御上天も全く國魂神をおろそかにし、バラモンの教を國內に獎勵したる神の戒めで御座いませう。カールス王は兎も角も、ヤーチン姫様の御居間丈なりと、三五教の大神を祀り、龍世姫の國魂神を奉齋致さば、初めて御安泰に渡らせられ、流石の難病も必ず本復遊ばす事と考へるのです」

「姫「キールスタン様、い、所へ心付かれました。妾も貴方の御意見通り、國魂の神を祀るべき事は、承知致して居りますが、何を言うても、此國はバラモン教の教を以て政治の助けとなしあれば、三五教の神を念ずる事、世間に現はれなば、如何なる戒めに遭ふやも計り難く、實は内々にて妾一人信仰を致して居りました。然らば

あなたと妾と心を協せ、龍世姫命の御前に御祈願致しませう」

キールスタンは嬉しげに打諾き、兩人聲を密めて

兩人「三五教の大神、殊更に國魂神龍世姫命、守り玉へ幸はひ玉へ」

と祈願を凝らした。不思議にもヤーチン姫の病氣は刻々に快く、四五日を経て元の如くに全快して了つた。

これよりヤーチン姫は俄に三五教を信ずる事となり、三人密かに館の一方に齋壇を設けて、日夜祈願をこらしつゝあつた。

雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨

セールス姫はマリヤス姫を従へ、髪ふり亂し、顔色青ざめ父の館に慌しく立歸り奥の間に駈入り、大聲をあけ泣き倒れて居た。

サアルボースの館の司タールスはセールス姫の悲しげなる聲を聞きつけ、恐るく其居間に駈つけて、両手をつき頭を下け

「恐れ乍ら姫様に御伺ひ致します。あなた様はヤーチン姫の館へおこし遊ばし、御歸りになるや否や、俄に變りし御様子、如何なる事が出来致しましたか、さうぞ包まず隠さず私まで仰せ付けられ下さいませ。あなたの御爲ならば、假令此タールス、身命を抛つても御無念を晴らし、御希望を叶へまゐらす覺悟で御座います」

セールス姫は漸うに顔をあげ、鬢の縫れ毛を撫で上げ乍ら、半巾にて涙を拭ひ、聲もきれんに

「タールス、よく聞いて呉れた。妾は終生拭ふ可らざる侮辱を受け、且九死一生の虐待に遭ひました。ア、残念や、口借や」

「聲を限りに其場に泣き倒れた。

「モシ御姫様、泣いて許り居られましたは、一向譯が分りませぬ。さうぞ詳しく御示しを願ひます」

「委細はマリヤス姫に聞いておくれ。餘り残念さぞ恐ろしさに心も顛倒し、言ふ事が出来ませぬ」

「又もや泣き倒れる。」

「マリヤス姫さん、あなたは姫様の御供をしてヤーチン姫の館へ御出でになつた以上は、一切の様子残らず御存じの筈、一伍一什包ます隠さず、言つて下さい。此方にもそれに對する覺悟をせなくてはなりませんから」

「ハイ」

と言つた限り、言ひ盡つて居る。マリヤス姫はセールス姫の侍女なれ共、平素よりセールス姫の嫉妬と猜疑と悪慮無道の行爲に愛想を盡かして居た。されど主人の事なれば、無理に戒め論す譯にも行かず、今迄幾度か命を賭して諫言せしことあれ共、いつも馬耳東風に聞き流して居た。今回のヤーチン姫に打擲されしは、全く天の戒め玉ふ所と深く心中に感謝して居た位であるから、其實狀をタールスに物語りし結果ヤーチン姫の如何なる災厄に陥り玉ふやも計り難しと、躊躇して居たのである。

タールスはマリヤス姫に向つて、短兵急に訊問の矢を放つた。マリヤス姫は僅かに小聲で

「ヤーチン姫様は御病氣の勢にて、セールス姫様の御肉體に少し許り御手をかけられました。さりと乍らヤーチン姫様はカールス王の御従妹、セールス姫様は臣下の

御身の上、假令如何なる事を遊ばしても彼是申上げる譯のものでは御座いませぬ。妾は此事許りは申上げる事は出来ませぬ。セールス姫様に、後でゆるく御聞き遊ばせ」

セールス姫は、矢庭に起ち上り、眼光凄じく、夜叉の如き勢にて、マリヤス姫の髻をひつ掴み室内を引摺りまはし、身体所構はず、打つ、蹴る、殴る、殆ど息の根も絶わん許りに打擲した。そしてセールス姫は聲を荒らけ

「不忠不義のマリヤス姫、臣下の身分として、主人より如何なる亂暴を加へらるゝ共、一言も申上げられないと言つたであらう。「我身を抓つて人の痛さを知れ」と云ふ事を覺て居るか。妾がヤーチン姫より被つた虐待は此通りだ。……タールス妾がなす業をよつく覺て居れよ。此通りであつた」

と又もやマリヤス姫の髪を掴んで室内を引摺りまはし、頭髮は房の如くに肉のついた儘、血に染つてむしり取られた。マリヤス姫は苦みをこらへ、セールス姫のなすが儘に任してゐた。最早虫の息となつて了つた。セールス姫は心地よげにニタリと笑ひ

「イヤ、タールス、汝は此由御父上、叔父上の前に報告されよ」

タールスは「ハイ」と答へて、慌だしく此場を立ち去つた。

(大正一一、八、六、書六、一四、松村眞澄録)

第二章 無理 槍 (ハ〇三)

タールスの報告によつて、サアルボース、ホーロケースの二人は足音荒々しく、此場に現はれ來り、セールス姫に向ひ

「只今タールスの注進に依れば、姫はヤーチン姫の病氣見舞に參り、名狀す可らざる虐待を蒙り、拭ふ可らざる侮辱を被りしと聞く。果して真か。サアルに於ても覺悟を致さねばならぬ。事の顛末を包まず隠さず物語つて呉れ。怪我は大きくはなかつたか。氣分はさうだ」

と流石の悪人も、我子の愛に引かされて、胸を轟かせ乍ら、慌だしく問ひつめた。セールス姫はさも苦しげに漸く顔をあげ

セールス「御父上様、叔父上様、残念で御座います。……どうぞ此讎敵を討つて下さいませー
サアル首を縦に振り乍ら

サアルボース「ヤア心配するな。天にも地にも掛替のない一人の娘、假令臺灣嶋を全部手に握
るども、汝の生命には換られ難し。大切なる娘を打擲致せし惜くきヤーチン姫、今
に思ひ知らせてやらう」

と子の愛に掛けては、目の中へ這入つても痛くないセールス姫の針を棒に變へての陳
辯を一も二もなく信じて了つた。

キマス「それにつけても残念なのは、マリヤス姫で御座います。彼はいつも妾が侍女とし
て仕へ乍ら、一事々々口答を申し、今日も今日とて、ヤーチン姫に無体の亂暴と耻
辱を受けたる主人の妾をいたはらず、却て痛快けに欣々立歸り、タールスの訊問

に對しても一言も答へず、つまり妾親子の惡虐無道を天の戒め玉ふものなりと、口
には言はねど、其面色にありくと書いてあります。それ故妾は女の身として亂暴と
は知り乍ら、ヤーチン姫より蒙りたる迫害と耻辱を彼に移して、タールスに見せま
した。女の身としての亂暴狼籍、心きつき娘と、どうぞ御叱り下さいませぬ様、餘
り残念が凝つて、マリヤス姫を打擲致しました」

とワツと許りに聲をあけて泣き倒れ、身を揺つて悶て居る。ホーロケースはニヤリ
と笑ひ

ホーロケース「ヤア待つて居たのだ。斯ういふ事がなければ、我々の陰謀は成就致さぬ。……
セールス姫、能くも打擲されて歸つた。如何に病氣とは言へ、ヤーチン姫の亂暴狼
籍、到底カールス王の妃としての資格はこれにて絶無となつた。あゝセールス姫、

汝が今日受けたる虐待と侮辱は、却て汝が身の仕合せ、よくもマア苦められた。……時にマリヤス姫、汝はセールス姫の侍女として、晝夜身邊に仕へ乍ら、何故ヤーチン姫に向つて抵抗せなかつたか。何の爲の侍女であるか。汝の不忠不義の天罰は、忽ち眼前に巡り來つて、此有様、天はセールス姫の手を借つて汝を戒め玉うたのだ。必ず恨むことはならぬぞ。惠の鞭と思つて、有難くセールス姫の前に兩手をついて謝罪致せよ」

マリヤス姫、漸く血汐の滴る顔を拭ひ乍ら、つと身を起し、四人をハツタと睨みつけ「妾こそは賤しき汝が娘セールス姫の侍女となり、汝親子が日夜の陰謀を監視せん爲、前アークス王の旨を受け、汝が家に忍び込みし者なるぞ。妾はアークス王の落胤マリヤス姫……言はゞカールス王とは兄妹の間柄、汝が如き賤しき親子の侍女と

して仕へしも、深き仔細あつての事、天は何時まで、汝親子が悪逆無道を赦し玉はず。妾はこれより、カールス王の御兄の前に出で、汝が陰謀を一々申告し國內一般に發表せん。さは去り乍ら、汝只今より悔い改めて、善道に歸りなば、此儘にて差許す可し。返答如何」

と、勢烈しく詰責し始めた。サアルボース外三人はマリヤス姫の言葉に肝を潰し如何はせんと思ひ居たりしが、茲まで企みし陰謀、いかで初心を觀さんや互に目と目を見合はし、各長刀を引抜き、マリヤス姫に前後左右より、斬つてかゝる。

マリヤス姫は刃の中を上下左右に潜りぬけ、サアルボースの襟首をグツと握つて、庭前の溜池に投げつけた。

マリヤス「ナニ猪口才な」

と抱つくタールスの又もや襟首とつて高殿より眼下の泉水に投げ込んだ。残り二人は此態に驚き、此場を逃げ去つた。

マリヤス姫は悠々として鏡の前に立ち、髪を繕ひ、衣服を着替へ、天の數歌を歌ひ乍ら、何處ともなく、玉の如き姿を隠して了つた。あゝマリヤス姫の行方はどうなつたであらう。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

カールス王は日頃念頭にかけたるヤーチン姫の危篤の報に接し、失望落膽の餘り、新高山の淡溪に身を投げ、戀愛の苦痛を免れんと、夜窓に籠を立出で、谷の畔に到り彼方此方と死場所を求めて彷徨ひつゝあつた。

谷の彼方に忽然として一塊の火光現はれ、其中より容色端麗なる美人、莞爾として中空を歩み乍ら、カールス王の前に近付き來り涙を腮邊にたらし乍ら、細き縷手をさし伸べて、カールス王の手を握つた。カールス王は忽ち精神恍惚として我身の此處にあることを忘るゝ計りであつた。能く見れば、夢寢にも忘れぬヤーチン姫に容貌骨格、言葉の綾までも其儘であつた。

女、言葉靜かに

「妾が最も愛するカールス王よ」

と言つた限り、恨めしげに兩眼に涙を湛へて居る其愛らしさ。カールス王は忽ち心痺き、今迄の悲哀の情は全く消ね失せた。

カールス「御身はヤーチン姫ならずや。病氣危篤に陥り、汝が命旦夕に迫ると聞きしより、

我は失戀の結果、此溪流に身を投げて、汝の來るのを幽界にて待たんと思ひしに、俄に變る汝の容貌、且つ健全なる其身体、如何せしぞ」

と不審顔に問ひつめた。ヤーチン姫は莞爾として打諾き乍ら、カールス王の手を取り、館を指して歸り行く。

館の前に近付き見れば、今迄伴ひ來りし姫の姿は煙の如く消れ、月は中天に皎々として輝き、油蟬の聲は彼方此方に騒がしく聞えて居る。カールス王はフツと氣が付き

カールス「サテ訝かしや、我は失戀の結果、溪流に身を投げんとせし時、ヤーチン姫來りて此處まで伴ひ歸りしと見しは夢なりしか。何は兎もあれ、館に入りて休息し、其上にて決心の臍を固めん」

と獨語つゝ、奥の間に忍び足にて進み入る。

今現はれしヤーチン姫は、セールス姫が使役せる金狐の邪靈の變化であつた。カールス王の變死を喰ひ止め、我目的を達成せんとすの計略より出でたる魔術であつた。

カールス王は奥の間に端坐し双手を組んで、ヤーチン姫の雲に乗り谷を渡り、或は我が館の前にて煙の如く消れ失せたるを見て、稍怖氣づき、疑惑の念に驅られて其夜は一睡もせず夜を明かした。

ヤーチン姫は三五教の神徳に依つて、さしもの重病も全く恢復したれば、ユリコ姫キールスタンを伴ひ、カールス王の館を訪問した。表門には門番のホールいかめしく控れて居る。

キールスタン「あいやホール、只今ヤーチン姫様の御來城、何卒一刻も早くテールンス殿に申上げ、カールス王の御前に奏聞して下さい」

キル 「ハイ承知致しました。暫く此門前に御待ちを願ひます」

と足早に奥深く進み入り、テールレンスに委細を報告した。テールレンスは直ちにカールス王の御前に伺候し

テールレンス 「只今ヤーチン姫、御來城でムいます」

との聲に、カールス王はハッヒ驚き

カールス 「ナニ・ヤーチン姫が参つたか。雲に乗つて参つたのでないか。又館の入口にて消滅は致さぬか。よく調べて来て呉れ」

テールレンス 「これは又異なる事を承はります。妖怪變化ならぬヤーチン姫様、雲に乗り、或は煙の如く消滅し玉ふ道理はムりませぬ。立派なる玉の輿に御乗り遊ばし、キールスタン、ユリコ姫御供を致して参られました。直様御通し申しませうか」

カールス王は暫く小首をかたけ、吐息をもらし乍ら

カールス 「何は兎も有れ、我目通へ通せ」

「ハイ」に答へて、テールレンスは自ら門前に迎へ、王の前に二人を案内した。

ヤーチン姫 恭しく両手を仕へ

ヤーチン 「妾は、ヤーチン姫で御座います。永らく病氣に付き、いろいろと御心配掛けまして、御蔭によりて此通り全快を致しました。さうぞ御安心下さいませ」

カールスは稍暫し無言の儘、ヤーチン姫の姿に目を放たず、考へ込んで居る。夜前現はれたヤーチン姫に寸分違はぬ訝かしさ。又もや昨夜の妖怪變化にはあらざるかと無言の儘考へ込んで居た。

斯かる所へ宰相神のサアルボース、ホーロケースの兩人は、セールス姫を先に立て

數多の從者を引連れ、カールス王の館の奥の間指して、遠慮會釋もなく進み來り、此態を見て、冷笑を向け乍ら、カールス王に向ひ

「これはくカールス王殿、いつでも御健勝で我々恐悅の至りに存じます。就いては御存じの通り、ヤーチン姫は發狂致し、身体は瘦衰へ、最早削るべき肉もなく、骨計の醜き有様、到底臺灣島のカールス王が妃として仕へまつる事は不可能となりました。實に我々は御氣の毒と申さうか、残念至極と申さうか、憂苦の結果申上げる言葉も知りませぬ。就いては一日も妃なくして、萬機の政事を總裁するこゝとは出来ずまい。不束乍ら我一人の娘セールス姫を王の御妃として献上仕りまする。どうぞ不束者なれ共、幾久しく御納め下されまする様に、國家の爲に申上げまする」

と稍強壓的にセールス姫を妃となすべき事を申込んだ。

カールス王は五里霧中に彷徨する如き面色にて、何の應答もなく默然として、ヤーチン姫、セールス姫の顔を見比べてゐた。

キールスタンは不審の眉をひそめ

「サアルボース殿の只今の御言葉。ヤーチン姫様は病氣の爲、身体瘦衰へ醜き御姿、到底王妃としての御用は動まらないかの如く仰せられました。が、御覽の通りヤーチン姫様の御病氣は既にく御全快遊ばされ、斯の通りの御健勝なる御身体、英氣に充ちた御容色、然るに何を以てか、宰相殿は左様なことを仰せられまするか」

と反問した。サアルボースはニツコと笑ひ

御座る。雲に乗り、或は身を白煙と消し、種々雑多の魔術を使い、王の館に忍び込み、巧言令色の限りを盡し、王の心膽を奪ひ、國內を擾亂せんとする悪魔の再来でムる。某は不肖なれ共、バラモン教の大神の神力に依りて天眼通を得たれば、ヤーチン姫の眞偽を分別する位は朝飯前の事でムる。あ、サテモく、當館内には旨神許りの……よくも集まつたものでムるワイ。アツハ、」

と肩を揺り、バツビキールスタンを腕め付けた。

「益々以て不届き至極の宰相の言葉、何を證據に左様の事を仰せらるゝか」

「汝等如き盲神の關知する所でない。賢明なるカールス王に於ては、よくも其眞偽を御存じの筈、我々が辯明するの必要は御座らぬ。……恐れ乍らカールス王様、如何思召しまするや」

カールス王は默然として胸をこまぬき、俯むいて思案に暮れて居る。

「アイヤ宰相殿、妾を妖怪變化とは、何を證據に仰せらるゝか。詳細に辯明なされよ。返答次第に依つては、ヤーチン姫容赦は致しませぬぞ」

カールス王の叔父エーリスは稍言葉を荒らげ、憤怒の面色物凄く

「ヤア、サアルボース、汝は無禮千萬にも我娘ヤーチン姫を妖怪變化と申すは何故ぞ。これには深き企みのある事ならむ。詳さに事情を申述べよ」

ホーロケースは立腹のかりて

「エーリス殿に申し上げます。貴方の御娘、ヤーチン姫様は先づ頃重病に罹らせられ、身体は瘦衰へ、見る影もなき御姿と御成り遊ばされ、到底御全快の見込もなく、カールス王様を始め、我々一同憂苦の情に堪へず、如何にもして一刻も早く御

全快遊ばす様と、バラモン神に祈願を籠め居りました所、三五教の邪神忽ち來つて姫の肉体を喰ひ、己代つてヤーチン姫と成りすまし、斯の如く堂々として、此處に姿を現はして居ります。現在御父上なる貴方の御目にさへも、其眞偽が判明せないまで、よく化込んだ狂神、到底一通りや二通りでは、正体を現はす様なチヨロコイ奴では御座らぬ。此眞偽はカールス王様の既に御承知の事と存じます。言はゞ貴方の御娘ヤーチン姫の仇敵で御座いますれば、此場で御手討に遊ばされたう存じます。萬一御疑ひとあらば、彈り乍ら此のホーロケースが此場に於て退治し御目にかけてませう」

ヤーチン姫「コレ、ホーロケース、そなたは何を言ふのだ。氣が違つたか。トツクリモ妾が顔を調べて見よ」

ホーロケース「カールス王様、貴方の御考へは如何で御座いまする」

カールス王「如何にも合點の往かぬヤーチン姫、昨夜雲に乗り、我前に現はれ、再び館の前にて消れ失せたる不思議の女に寸分違はぬ此女。我は正しく妖怪變化と見るより外に手段はない」

サアルボース、ホーロケースの兩人は王の言葉を聞くより、俄に鼻息荒く

「王者の言葉に二言なし。汝ヤーチン姫、妖怪變化にきはまつたり。此國の掟に従ひ、ヤーチン姫を籠に乗せ、新高山の淡溪に投げ棄て、災の根を絶たん。……如何にエーリス殿、これでも猶御疑ひあるや」

と睨めつけた。エーリスは暫く首を傾けて居たが、頓て王に向ひ

「カールス王よ、ヤーチン姫を妖怪變化に相違なしと断定さるゝや」

息を喘ませ、問ひつめた。カールスは首を左右に振り

カールス王「否々我は決して妖怪變化と断定はせない。只訝かしき昨夜出會ひたる女に、容貌其他寸毫の差なきを不思議と思ふのみ。果して妖怪變化なりや、ヤーチン姫なりや、これは未だ判明せず」

エーリスはサアルポース兄弟に向ひ

エーリス「宰相殿、今の王の御言葉に依れば、未だ的確なる妖怪變化と認め玉はざるに非ざるか。然るに輕々しくヤーチン姫を妖怪變化として、溪流に乗つるは沒義道で御座らう。今一息御熟考を願ひませう」

ホーロケースは言下に

ホーロケース「お黙りなさい。カールス王の叔父たるの地位を利用して、我等が忠言を遮らん

とする貴神の振舞、如何に親子の愛情に眼眩めばとて、妖怪變化を以てカールスの妃となし、國家を紊亂せんとするは不忠不義の至りで御座らう。御控ねめされ」

サアルポース

「一旦王者の口より妖怪變化ならむと宣示されたる以上は、再撤回す可らず。

且又現在目前に居る妖怪に對し、眞偽に迷ふが如き暗君なれば、王としての資格は絶無なり。速かに退位さる、か、さなくば我言葉を容れ、ヤーチン姫と變じたる妖怪を淡溪に捨て、セールス姫を容れて妃となし玉はゞ、上下一致、天下泰平の祥兆を見む事火を睹るより明かならむ、返答承はらむ」

のつびきさせぬ釘鏡にカールス王も返す言葉なく、うつくとして顔色青ざめ、二三の從臣と共に奥の間に姿を隠した。サアルポース、ホーロケースの二人は數多の從

臣に命じ、ヤーチン姫を高手小手に縛め、粗末なる吊籠に入れ、父のエアリス始
 め、キールスタン、ユリコ姫の止むるのも聞かばこそ、突きのけ撥ねのけ、凱歌を奏
 しつ、淡溪指して進み行くのであつた。

(大正一一、八、六、舊六一四、松村眞澄録)

第三章 玉 藻 山 (ハ〇三)

眞道彦命は國治立大神の時代より、此島に鎮まり、子孫皆眞道彦の名を繼いで、
 新高山の北方に、聖場を定め、三五の道を全島に擴充し、神國魂の根源を培ひつ、
 あつた。然るにバラモン教の一派此島に漂着してより、花森彦命の子孫なるアーク
 ス王は、三五の教を棄て、バラモン教に歸順せし爲、住民は上下の區別なく、殘ら
 ずバラモンの教に歸順して了つた。されど新高山の以北にのみアークス王の權力
 も、バラモンの教權も行はれて居たのみで、新高山以南は少しも勢力が及ばなかつ
 た。

眞道彦は遠く新高山を越えて、東南方に當る高原地日月潭に居を構へ、東南西の地

を教化しつゝあつた。然るにアークス王の宰相たるサアルボース兄弟は、此地點をも占領し第二の王國を建てんと、時々兵を引連れ、玉藻山の聖地に向つて攻めよせた。されど龍世姫の永久に鎮まり玉ふ大湖水を南へ越ゆることは容易に出来なかつた。

或時ホーロケースはバラモンの信徒を數多引連れ、三五教の巡禮に身をやつし、玉藻山の聖地に、雲霞の如く押寄せ、隙を覗つて眞道彦命を生擒し、一舉に全島を占領せんと試みつゝあつた。眞道彦命はホーロケースの惡辣なる計畫を前知し、數多の信徒を驅り集め、言靈戰を以て、之れに向ふこととなし、玉藻山の山頂に、祭壇を新に設けて、寄せ來る敵に向つて、言靈線を發射しつゝあつた。され共、バラモン教のホーロケースは少しも屈せず、獅子奮迅の勢を以て各隠し持つたる兇器を振り翳し、関を作つて一舉に亡ぼさんと斬り込んで來た。

眞道彦の子に日楯、月鉦と云ふ二人の信神堅固なる屈強盛りの二兒があつた。父眞道彦はホーロケースに向つて、言靈を奏上するや、ホーロケースは怒つて、眞道彦の胸板を長劍を以て突き刺し、此場に打墮し、凱歌を奏し、其勢天地も震ふ計りであつた。突刺されて其場に倒れた眞道彦の身体より白烟忽ち濛々として立ち上がり、美はしき女神となつて、雲の彼方に姿を隠した。

日楯、月鉦の兄弟は父眞道彦の行方不明となりしを歎き、如何にもして、ホーロの一族を亡ぼし、父の仇を報じ、三五教の教を再び樹立せんと苦心の結果、湖中に泛べる龍の島に夜私かに漕ぎつけ、祈願をこらして居た。此時既に玉藻山の聖地は、ホーロケースの占領する所となつて居た。眞道彦の部下は四方に散亂して、其影さへも止めなかつた。

龍の島は樹木鬱蒼として、湖水の中心に浮び、周圍殆んど一里計りもある靈島であつた。二人は島山の頂上目蒐けて登り行く。此處に高大なる巨岩壁の如く立並び、中央に人の入る計りの岩穴が開いて居た。兄弟は其岩窟に思はず足を向けた。炎熱焼くが如き夏の空に得も言はれぬ涼しき香ばしき風、坑内より頻りに吹き来る。二人は何となく此窟内を探險したき心持となつて、思はず知らず四五丁計り奥へ進んで行つた。

俄に強烈なる光線がさして來た。振かへり見れば、最早岩窟の終點と見えて、兩方に圓き天然の穴が穿たれ、そこより太陽の光線が直射してゐた。あたりを見れば、階段の如きもの自然にきざまれてゐる。日楯、月鉾の二人は、此階段を登り詰め、前方を遙かに見渡せば、紺碧の波を湛へた玉藻の湖水、小さき島影は彼方此方に浮み、

白き翼を擴けたる數多の水鳥は前後左右に飛び交ふ様、實に美はしく、二人は此光景に見惚れて居た。遠く目を東南に注げば、玉藻山の聖地は以前の儘なれど、ホーロケースが襲來せしより、バラモン教の據る所となり、何となく恨めしき心地せられて、稍今昔の念に沈んで居た。

日楯「オイ、弟、斯の如き聖場を敵に蹂躪され、父上は行方明とならせ玉ひ、我々兄弟は身の置所なく、漸くにして此龍の島に逃げ來りしもの、未だ安心する所へは往かない。罷り違へばバラモン教の奴原、此島迄我等が後を追跡し來るやも計られ難し、我等兄弟は今此處に於て、三五教の大神に祈願をこらし、運を一時に決せば如何に。見下せば千丈の斷崖絶壁、神に祈願をこめ、此青淵に飛び込み、生死の程を試し見む。万一我等兩人生命を取り止めなば、再び三五教は元の如く勢力を盛返

し、バラモン教の一派を新高山の北方に追返し得む。月鉾、汝如何に思ふや」
と決心の色を顯はして話しかけた。

月鉾「兄上の仰せの如く、これより天地神明に祈願をこめ、此斷崖より湖中に飛び込み
神慮を伺ひ見む」

と同意を表し、二人は天津祝詞を奏上し、此世の名残と天の數歌を數回繰返し唱へて
居た。傍の密樹の蔭より

「神が表に現はれて

善と惡とを立別る

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ

三五教の宣傳使

言依別や國依別の

神の司は此處に在り

國治立大神の

教を傳ふる眞道彦

脆くも敵に聖地を追はれ

玉藻の山を後にして

雲を霞と逃げ去りぬ

後に残りし兄弟は

力と頼む父には別れ

教の御子には見棄てられ

寄邊渚の捨小船

泣くく聖地を立出でて

ついに荒波龍の島

涙の雨に濡れ乍ら

此岩窟に尋ね來て

玉藻の湖面を打眺め

感慨無量の思ひ出に

今や生死を決せんぞ

思ひ煩ふ隣れさよ

日楯、月鉾兩人よ

必お心を惱ますな

琉球の寶玉の

御稜威を吾が身に負ひ來る

三五教の宣傳使

汝等二人に玉藻山

元の昔に恢復し

誠の道にペラモンの

敵を言向け和すてふ

珍の神寶授けなむ

ひ、惟神々々

御靈幸はひましますよ

と歌ひながら、此場に二人の宣傳使は現はれ來り、兄弟の前に直立して、軽く目禮した。

兄弟は夢かと思ひ計り打驚き、平身低頭稍少時、何の應へもなく計り。やうくにして兩人面をあぐれば、こはそも如何に、二人の宣傳使の影は何處へ消れ失せしか、山の

尾の上を通ふ風の音颯々響き亘るのみであつた。

これより二人の兄弟は、勇氣日頃に百倍し、天の數歌を歌ひ乍ら、湖上に泛べる島々を残る限なく駈巡り、二人の宣傳使の所在を尋ねたれ共、何れへ行きたりしか、其影さへも見ること出来なかつた。されど二人は何となく勇氣に充ち、再び玉藻山に向つて言靈戦を開始せんと、湖水に浮きつ沈みつ、七日七夜の御禊を修し、言靈の練習に全力を盡す事となつた。

セールス姫の侍女として永く仕へ居たるアークス王の落胤なるマリヤス姫は、サアルボースの館を脱け出で、夜を日に次いで、新高山を東南に越れ、玉藻の湖邊を巡つて、玉藻山の聖地に救はれて居た。然るに、此度のホーロケースの襲來に依りて、眞

道彦命は行方不明となり、數多の部下は四方に散亂し、日楯、月録の二人はこれ亦、行方不明となり、進退谷まる折しも、ホーロケースに捕へられ、散々な責苦に會ひ、遂には一室に嚴重なる監視人をつけ、幽閉されて了つた。

ホーロケースは兄のサアルボースと相應じて、此全島の主權を握らんと、意氣昇天の勢にて、玉藻山にバラモン教の聖場を開き、我物顔に振るまつて居た。そうしてマリヤス姫を幽閉し、時々其居間に到りて、強談判を開始することもあるつた。

話し變つて、マリヤス姫は、悲歎の涙に暮れ乍ら、獨ごちつ、心の憂さを歌つて居た。

マリヤス姫「水の流れと人の行末

變れば變る世の中よ

遠津御祖の其源を尋ねれば 高天原のエルサレム

花森彦のエンゼルと

仕へ玉ひし我御祖

美しの命の御裔なる

アークス王が子と生れ

浮世を忍ぶ落胤の

我は果敢なき身の因果

高砂島を所知食す

カールス王の妹と生れ

心汚なきサアルボースが娘

セールス姫の侍女となり

醜の企みを探らんと

父の御言を畏みて

心を盡す折柄に

セールス姫のあぢきなき

其振舞に追ひ立てられ

今は果敢なき獨身の

行方も知らぬ旅枕

神の情に助けられ

眞道彦神の開きます

三五教の靈場と

音に聞わし玉藻山

樂しき月日を送る折

浮世の風に煽られて

あゝ何とせむ只泣く涙

戀しと思ふ月銚の

親子兄弟諸共に

行方も分かぬ旅の空

マリヤス姫の真心は

隔つることも何のその

とは言ひ乍ら情無や

これの館に救はれて

月に村雲、花には嵐

今日は悲しき幽閉の身

かはき果てたる夕まぐれ

神は何れにましますか

夜半の嵐に散らされて

假令何處にますとも

山野海河幾千里

尋ねて行かむ君が側

心汚なき醜神の

ホーロケースに捉へられ

暗き一間に幽閉されて

面白からぬ月日を送る我身の上 朝に夕に涙の袖を絞りつゝ

戀しき人の行方を尋ね

夢になりとも我戀ふる

月銚神に會はせかしこ

木花姫の御前に

祈りし甲斐もあら悲しや

ホーロケースの横戀慕

牢獄の暗き我居間に

夜なく來りてかき口説く

其言の葉の厭らしさ

消ね入りたくは思へ共

神ならぬ身の如何にせむ

逃るゝ由もないじやくり

戀しき人は來まさずに

蝮の如く忌み嫌ふ

醜の曲靈の執念深く

朝な夕なに附け狙ふ

「時遅れては一大事」

と有無を言はせず、小脇にひんだき、密室を駈出さんとする時しも、日楯、月鉾の兩人は、琉球の玉の威徳に感じたりけむ、身体より強烈なる五色の光を放射し乍ら、此場に現はれ來り

兩人「ヤア、ホーロケース、暫く待たれよ」

と聲をかけた。ホーロケースは轉けつ帳びつ、マリヤス姫を後に残し、數多の部下と共に、雲を霞と夜陰に紛れ、何處ともなく姿を隠した。

月鉾「あ、マリヤス姫殿、御無事で御座つたか、芽出度いく。これと云ふも全く、大神様の御恵み」

と両手を合せて、感謝の涙を流して居る。

マリヤス姫は夢か現か幻かど、飛び立つ計り喜び勇み、あたりをキョロ／＼見廻し乍ら、ヤツと胸を撫でおろし

「悲しき恐ろしき苦しき所へお越し下さいまして、妾を救ひ賜はり、嬉しいやら、有難いやら、何とも申上ぐる言葉は御座いませぬ。……日楯様、月鉾様、最早節の内は別状は御座りませぬか」

と云ひつゝ、月鉾にすがり着いた。

月鉾「マリヤス姫殿、御安心なさりませ。最早敵は残らず散亂致しました。今後の警戒が最も肝要で御座います。まづ／＼御心を落着けられよ」

日楯「サア／＼、皆さん、打揃うて神前に天津祝詞を奏上致しませう」

茲に玉藻山の聖地は再び、三五教に歸り、宏大なる神殿は造營され、日楯、月鉾の

聲名は遠近に押し擴まり、旭日昇天の勢となつて來た。あ、惟神靈幸倍坐世。

(大正一一、八、六、舊六、一四、松村眞澄録)

第四章 淡溪の流 (八〇四)

眞道彦命はホーロケースの軍勢に包圍攻撃され、言靈を發射したれども、何故か少しも効力現はれず、遂にはホーロの鋭き槍先に胸を刺されて、アワヤ亡びんとする時しもあれ、木花姫の化身に救はれ、鎧を棄て、二三の従者と共に、新高山の峰續き、アリス山の溪谷に逃れ、谷間の凹所に草庵を結び、あたりの果物などを食しつゝ、神を祈り、時の到るを待ちつゝあつた。

頃しもあれや、絶壁の谷の傍に當つて、阿鼻叫喚の聲切りに聞え來る。何事ならむと仰ぎ見れば、二人の男女谷を指し、「アレヨク」と、狂氣の如く叫び廻つて居る。飛沫を飛ばす大激流に藤にて編みたる籠一個、浮きつ沈みつ流れ下るを見、直に

眞道彦命は三人の従者に命じ、「彼の籠を拾ひ來れよ」と命じた。され共瀧の如き激流、近よるべくもあらず、一生懸命に拍手し乍ら言葉を奏上した。

籠は不思議にも渦巻にまかれて、眞道彦が足下の淵にキリ／＼と舞ひ寄つた。直に三人の従者は籠を拾ひ上げ、庵の前に擔ぎ來り、中をあらため見れば、容色端麗にして、品格高き一人の美女、高手小手に縛られ、氣絶して居た。四人は驚き、直に籠より引出し、水を吐かせ、縛を解き、いろ／＼と手を盡して漸く蘇生せしむる事を得た。

向うの河岸に立てる二人の男女は、兩手をあげて歡呼し、或は兩手を合せ此方に向つて感謝の意を表して居る。

蘇生せし美人は餘りの疲労に、言葉も發し得ず、僅に目を開き、口をモガ／＼させ

乍ら、何か言はんごするもの、如くであつた。斯くする事半日許り、日は漸く新高山の峰に没し、四面暗黒に閉された。四人は代る／＼祝詞を奏上し、漸く曉の鳥の聲彼方此方の谷の本の間に聞え始めた。

此時何處より渡り來りけむ、二人の男女此場に現はれ、女の手を取り

「ヤーチン姫様、よくマア無事で居て下さりました。キリスタン、ユリコ姫で御座います」

此聲にヤーチン姫はハツと氣が付き

「ア、嬉しや、兩人よくマア來て下さつた。何れの方かは知りませぬが、危き所をお助け下さつた。さうぞ兩人より宜しく御禮を申して下さい」

兩人は眞道彦命に向つて、大地に兩手をつき

兩人「有難う御座います」

と云つた限りあゝは嬉し涙にかき暮れて、無言の儘俯むいて居る。

眞道彦「世の中は相身互、御禮を言はれては却て我々の親切が無になります。マアくゆるりと御休み下さいませ」

と奥の一間に三人を引入れ、あたりの木々の果物を取り来りて饗應し、種々の物語に時を移した。

谷の彼方にはサアルボリス、ホーロケースの部下の者共、ヤーチン姫の最後を見届けんと右往左往にさゞめき乍ら、溪流の面を見つめて居た。庵の中より眞道彦命は此体を覗き見て、三人に警戒を與へ、暗に乗じて谷間を流に添ふて遡り、アリス山を涉り、漸くにして玉藻の湖水の畔に着いた。

日楯、月鉦の二人は再び聖地を恢復し、教勢旭日昇天の如く、天下に輝きたれ共、我父の行方の不明なるに心を痛め、湖水の畔に来つて御禊を修し、祈願をこむる時であつた。數百の取次信徒は此處に集まり、共に感謝祈願の詞を奏上し居る際であつた。眞道彦命はヤーチン姫、ユリコ姫、キールスタン其外三人の従者と共に此處に歸り來り、數多の人々の祈りの聲を聞いて、暗を幸ひ、木蔭に身を潜め、様子を伺ひつゝあつた。

眞道彦命は聖地の大變より、深くアリス山の溪谷に身を隠し、世を忍び居たりし事とて、玉藻山の靈地は再び三五教に取返され、我子の日楯、月鉦の二人が三五教を開き居る事を夢にも知らなかつた。それ故今此多人數の祈りの聲を聞いて、若しやホーロケースの一派にはあらざるか。深く心を痛めつゝあつたのである。

日楯は御禊を終り、衆人の中に立ち、宣傳歌を謠ひ始めた。

日楯「神が表に現はれて

善と惡を立分ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ

必ず人を恨むな

三五教の御教

さはさり乍らさり乍ら

我等兄弟兩人は

三五教の神司

國治立大神の

清き教を宣べ傳ふ

誠の道の宣傳使

眞道の彦の生みませる

三五教の取次ぞ

假令天地が變る共

親と現れます吾が戀ふる

眞道の彦の御行方

此儘見捨て、おかれやうか

定めなき世と言ひ乍ら

何處の空にましますぞ

バラモン教の神司

ホーロケースや其外の

魔神の爲に捉はれて

百千萬の苦みを

受けさせ玉ふに非ざるか

思へばくあぢきなき

我身の上よ身の果てよ

父が此世にましますば

一日も早く片時も

皇大神の恵にて

一目なりとも會はせかし

せめては空行く雁の

便りもがなと朝夕に

祈る我等が眞心を

汲ませ玉へよ天津神

國津神達八百萬

高砂島を守ります

龍世の姫の御前に

心を清め身を淨め

慎み敬ひ祈ぎまつる。

朝日は照ることも曇ることも

月は盈つ共虧くる共

高砂島は沈むことも

誠の心は世を救ふ

神の宜らせし太祝詞

確かに証兆あるならば

我願言を聞きしめせ

玉藻の山は日に月に

神の光も輝きて

旭の豊榮登るごと

榮にませ共あが父の

居まさぬ事の淋しさよ

風吹く度に父の身を

思ひ惱ませ雨の宵

露の晨に大前に

あが國人の安全を

祈る傍父の身の

恙なかれと祈るこそ

日楯、月鉦兩人が

盡きせぬ願とまこし召せ

神は我等と俱にあり

神は汝と俱にあり

とは言ふもの、情なや

日に夜に研きし我魂も

父を慕ひし恩愛の

涙に心曇り果て

生死の程も辨へぬ

暗き身魂ぞ悲しけれ

ア、惟神々々

御靈幸はひまじませよ

兄弟は互に手を取り、足を揃へて踊りつ、舞ひつ、祈りを捧げて居る。

此歌を聞いて、眞道彦命は始めて我子の消息を知り、且つ三五教の様子を畧悟り

欣喜雀躍の餘り此場に立出で、二人の我子に飛びつかんかど許り氣をいらだてた。され共、傍にヤーチン姫其他の人々のあるに心を奪はれ、藏く胸をヂツと怵へて、心靜かに成行を見守つて居た。

(大正一一、八、六、舊六、一四、松村眞澄録)

第五章 難有迷惑 (八〇五)

日橋、月鉾の兩教主は數多の取次信徒等に取巻かれ、數多の松明を點じ乍ら、湖の畔を長蛇の陣を作り、蜿蜒として玉藻山の聖地を指して歸り行く。松明の火光は湖面に映じ、恰も水中に火龍の泳ぐが如く、壯觀譬ふるに物なき眺めであつた。

眞道彦命は松明の後より、ヤーチン姫、ユリコ姫、キールスタンと共に一行に従ひ、聖地に歸り着いた。されき一人として、夜中の事と云ひ、最後より來りし事とて氣の付く者は一人もなかつた。

日橋、月鉾の二人は新に建造されたる神殿に進み入り、「父眞道彦命の一日も早く行方の分りますよう」……と一心不亂に祈念をして居る。

そこへ衆人を掻き分け、悠々として現はれ出でたる眞道彦命は、先づ第一に神前に向つて拍手し、祝詞を奏上し始めた。二人の兄弟は其姿を云ひ、聲を云ひ、且つ……我が前に出で、祝詞を奏上する者は、三五教に一人もなし、正しく神の顯現か、但は我父の歸りませしにあらずや……と心中に且つ疑ひ、且つ歡び、祝詞の終るを待つて居た。

眞道彦命は拜禮を了り、一同に目禮をなし、兄弟の手を握り、涙を流し乍ら

眞道彦「我れは久しく此聖地を逃れ居たる汝が父なるぞ。よくマア無事に生き永らへしのみならず、再び聖場を復興し得たるは、全く汝等が信仰の真心を、三五教の大神御照覽遊ばし、厚く守らせ玉ふものならむ。あ、有難や、辱なや」
と落涙に咽び、嬉しさ餘つて、其場にバタと打倒れた。

これを聞いた數多の取次、信徒等は一齊に神徳を讚美し、神恩を感謝し、欣喜雀躍の餘り、夜の明くるも知らずに、直會の宴に、日三日、夜三夜を費やした。玉藻の聖地開設以來の大盛宴であつた。

眞道彦命は日楯、月鉾二人の兄弟に、美はしき館を作られ、そこに老の身を養ふこととなつた。されど眞道彦は年齢に似合はず、神徳、靈肉共に充實して若々しく、元氣も亦壯者を凌ぐ許りであつた。

玉藻の湖水は東西十五里、南北八里、山中にては可なり大なる湖水であつた。玉藻山の靈地は殆んど其中心に位し、東の端に天嶺といふ小高き樹木密生せる景勝の山地があつた。そこに日楯をして守らしめ、神殿を新に造り、政教一致の道を布かしめた。そうしてユリコ姫を宮司とし、聖地の東方を固めしめ、眞道彦命は玉藻山の靈

場に在つて、老後を養ひつゝ、ヤーチン姫を奉じ、神業に奉仕して居た。

玉藻湖の西端には泰嶺と云ふ靈山があつた。そこには月鉾を配置し、マリヤス姫を神司として奉仕せしめつゝあつた。玉藻山以東を日潭の聖地と稱し、以西を月潭の靈地と稱へ、オレオン星の如く三座相並びて、三五枚の神業に奉仕し、其稜威は臺灣全島に轟き渡り、新高山の山麓なる泰安の都にまで、其勢力は轟いて居た。

泰嶺の鎮守として使へたる月鉾は神の命に依り獨身生活を續けて居た。マリヤス姫は何時とはなしに月鉾に對し戀慕の念起り、矢も楯もたまらず、神業を閑却して晝夜の區別なく、月鉾に對し心を奪はれ、隙ある毎に寄り添ひて、種々と思ひの丈を述べ立つるのであつた。されど月鉾は信心堅固にして、神の命をよく守り、且つマリヤス姫は泰安の都にましますカールス王の妹たる尊き身の上なる事を知り居たれば、手

厳しく戒むる事も得せず、又放逐する事も得ずして、心の限り尊敬を拂つて居た。マリヤス姫の戀路は益々猛烈となり、遂には取次信徒等の端に至る迄、月鉾とマリヤス姫の間に温かき關係の結ばれある事を固く信じて了つた。月鉾は神命と姫との板挟みとなつて、日夜苦慮しつつ其日を送つて居た。又日楯はユリコ姫と共に夫婦となり睦まじく神業に参加して居た。

老たりとは云へ、未だ元氣旺盛なる眞道彦命は妻に先立たれ、獨身の生活を續けて、餘生を此聖地に送つて居た。危き生命を救はれたる眞道彦に對して、ヤーチン姫は何時とはなしに戀に落ち、晝夜煩悶の結果、面やつれ、身体骨立し、遂には重き病の床に就いた。

侍女のユリコ姫は天嶺の聖地にあつて、日楯の妻となり、早くも妊娠の身となつて

居た。それ故ヤーチン姫の重病を看護する事さへ出来なかつた。キールスタンは晝夜の別なく、忠實に姫の看護に全力を盡して居た。され共姫の病は日に／＼重る計りであつた。

眞道彦命は姫の大病を救はむと、朝な夕な神前に祈願をこらしつゝ、ありしか共、少しも其効驗現はれず、尊きエーリスの姫君、如何にもして、元の身体に回復せしめむと心膽を碎き乍ら、病床を見舞つた。キールスタンは眞道彦命の來れるに打喜び、挨拶も碌々になさず、あはてふためきて、ヤーチン姫の枕許に走り寄り、耳に口を寄せ

キールスタン「あなたの日頃戀はせ玉ふ眞道彦命様が、今茲におみねになりました」
と囁いた。此聲に姫はムツクと起上り、さも嬉しげに、眞道彦命に向ひ

ヤーチン姫「眞道彦様、ようこそ御親切に御訪ね下さいました。モウ妾、これぎり國替致し
ましても、後に残る事は御座りませぬ。どうぞ妾の死後に於て、夢になりとも妾の
事を思ひ出し玉ふ事あらば、只一言なりと我名をお呼び下さいませ。これが妾の一
生の願ひで御座います」

と耻かしげに言ひ終つて、枕に顔を伏せた。眞道彦は稍當惑の體にて、少時ためらひ
居たりしが、斯く迄我を慕へる此婦人に對し、今はの際に、餘り沒義道にあしらふべ
きに非ず、何れ死に行く運命の人ならば、優しき言葉をかけて、潔く此世を去らし
むるに若かじ……と決心し、毅然として身を構へ

眞道彦「ヤーチン姫殿、あなたの尊き御心、木石ならぬ眞道彦も満足に存じます。今迄
の貴女に對する無情の罪、御赦し下さいませ」

とキツバリ言ひ放つた。ヤーチン姫は此言葉に何となく元氣つき、病の身を忘れて身を起し、膝を摺り寄せ、命の顔を打まもり、感謝の涙をハラ／＼と流し乍ら

ヤーチン「日頃戀ひ慕ふ眞道彦命様、そんならあなたは今日只今より、ヤーチン姫の夫、よもや御戯談では御座いますまいなア」

と念を押した。

眞道「エー勿体ない、私も神に仕ふる身の上、決して嘘は申しませぬ」

ヤーチン「そんなら……あなたは妾の夫、モウ斯うなる上は、病位は物の數では御座いますぬ」

と瘦こけたる體も俄に元氣つき、顔の色さへ仄紅く、直に井戸端に歩み寄り、身を淨め、自ら衣服を着替へ、身繕ひを終つて、再び眞道彦の前に現はれ來り

ヤーチン「あゝ我夫様、我居間へ御越し下さいませ。いろ／＼と申上げたき仔細が御座います」

と無理に手を曳き、我居間に姿を没した。

ヤーチン姫は我居間に眞道彦命を伴ひ、あたりを密閉して兩人端座し聲を私めて「カールス様、泰安の都の様子は如何になりましたか。セールス姫は如何遊ばされました。さうぞ包まず隠さず、御漏らし下さいませ」

眞道「これは又異なることを承はるものかな。私は祖先代々此玉藻の聖地に住居して三五教を開く者、畏れ多くも泰安の都のカールス王なきは思ひも寄らぬ御言葉、永の御病氣の爲に、精神に御異狀を御來し遊ばされ、カールス王に、私が見わたのでせう。決して私は左様な尊き身分では御座りませぬ。さうぞトツクリと御檢め下

され」

「ヤーチン姫の面前にワザミに顔をつき出して見せた。ヤーチン姫は、兎見斯う見し乍らニヤリと笑ひ

「如何に御忍びの御身の上なればとて。そう御隠しなさるには及びますまい。妾が淡溪に投げ込まれ、生命危き所へ貴方は妾を助けんと、先に廻つて御救ひ下さつた生命の恩人カールス様に間違ひは御座いますまい。最早斯うなる上は、御隠しなさるには及びませぬ。さうぞ打解けて誠の事を仰有つて下さいませ。何程御隠し遊ばしても、さここから何處まで、毛筋の横巾も違はぬあなたの御姿、これが如何して別人と思へませうか」

真道

「これは聊か迷惑千萬、能く御考へ遊ばしませ。カールス様は未だ御年三十に成ら

せ玉はず、我は最早五十路の坂にかゝつて居る老ほれ者、何程能く似たりとは言へ老者と壯者、皮膚の色、聲の色、決してく同じ筈は御座いませぬ。假令姿は能く似たりと雖も、月に籠、尊卑の點に於て雲泥の相違ある私、何卒御心を鎮められ、眞偽の御判断を下し遊ばす様、御願致します」

ヤーチン

「さここまでも用心深いあなたの御言葉、女は嫉妬に大事を漏すとの諺を信じ、分り切つたる秘密を、さここまでも包み隠さんと遊ばすあなた様の御心根が恨めしう御座ります。さここまでも御隠し遊ばすならば、最早是非も御座りませぬ。眞道彦命ならば眞道彦命で宜しう御座ります。王様に間違ひは御座りませぬ。さうぞ此處にて改めて結婚の式を御擧げ下さいます様に御願致します」

真道

「ア、困つたなア。さうしたら姫様の疑が晴れるであらうか。他人の空似とは云

ひ乍ら勿体ない、カールス王様に能く似て居るとは……眞道彦の何たる光榮であらう。否迷惑であらう。ア、さうしたら此難關が切り抜けられようかなア」
とさし俯いて溜息をついて居る。

「何程御隠し遊ばしても、カールス王様に間違はありませぬ。あなたはサアルポースやホーロケース兩人の悪者に恐れて、淡溪の畔に身を隠し、眞道彦命と名を變へて、此世を偽る卑怯未練の御振舞、御父上の許し玉ひし夫婦の仲、未だ一夜も枕は交さね共、親と親との許し玉ひし夫婦の間柄、誰に遠慮が御座いませう。あなたも昔はエルサレムに仕へ玉ひし、天使花森彦命の御末孫、高國別や玉手姫の悪神の腹より生れ出でたる、サアルポースや、ホーロケースを父や叔父に持つ、セールス姫が御氣に入らぬのは御尤もで御座います。さり乍ら何を苦んで、泰安の都を脱

け出で、あの様な處に身を隠し遊ばしたので御座いますか……それはそうと、妾の生命を助け下さつたのもヤツバリあなた様、都を出でさせ玉ひし其御蔭、盡きぬ縁の證にて、戀しきあなたに助けられ、此里に参りましたのも、結ぶの神の引合せ、これより夫婦心を合せ、三五教の信徒を引つれ、時を見て泰安の都に攻め寄せ、父の業を御継ぎ遊ばす御所存は御座いませぬか。それさへ承はらば、妾は此儘歸幽致す共、あなたの雄々しき心を力として、幽界より御神業を御助け申す覺悟で御座います。生ても死しても、決してあなたの御側を離れぬヤーチン姫の眞心、さうぞ仇に思召し下さいますな」

眞道「私には日楯、月鉦と云ふ二人の息子が御座います。私の妻は既に此世を去り、今は此通り位牌となつて、此神殿に御祭りして御座いますれば、さうしても妻を持つ

「ここは、私として出来ませぬ。併し乍らあなたの御志無にするも情なく存じますれば、夫婦の交はりのみは御許しを頂きまして、夫婦氣取で御神業に参加させて下さいませ。カールス王様の御身の上にて就て、變事あらば時を移さず、我々は數多の強者を引具し、泰安の都に乗込んで御助け申し、貴女の望みを達し参らす覺悟で御座います。此事計りは御安心遊ばしませ。決して私はカールス王では御座りませぬ。正真正銘の眞道彦で御座います」

「ヤーチン」

と言ひ乍ら、矢庭に眞道彦の利腕にしがみつき、涙と共に泣き口説き、身もたれ居る。

此時何氣なく、隔の襖をおし開き、入り来るキールスタンは此態を見て驚き、物を

も言はず一目散に此場を駈出した。これより眞道彦命とヤーチン姫の間には、情意投合の契約が結ばれたるものとして、窃に三五教の一般に傳へらるゝ事となつた。されど眞道彦命は將來を慮り、姫に對して一指だにも支へなかつた。

姫は其後病氣道々快復して元の如く容色端麗なる美人となり、聖地の大神殿に朝夕奉仕して、神の威徳は益々四方に輝き亘つた。眞道彦命は飽く迄もヤーチン姫を尊敬し、主人の如く待遇して、至誠を盡した。ヤーチン姫も漸くにして、眞道彦命のカールス王に非ざりしことを悟り、且つ命の信仰の堅實なるに感歎し、互に胸襟を開いて神業に参加し、時の到るを待ちつゝあつた。惟神靈幸倍坐世。

(大正一一、八、六、荷六、一四、松村眞直録)

第六章 麻の素れ (八〇六)

泰安の都に於けるカールス王は、最愛のヤーテン姫を失ひ、快々として樂まず、且つ蛇蝎の如く忌み嫌ひし、サアルボースの娘セールス姫を無理矢理に王妃に強要され、懊惱の結果遂に病を發し、淡溪の畔にささやかなる館を作り、これに静養の名の下に蟄居せしめらるゝ事となつた。而して四五の役員、館の内外を警固し、他人の出入を嚴禁しつゝあつた。

セールス姫は我父のサアルボースを宰相となし、我叔父に當るホーロケースを副宰相として、新高山以北の政權を握り、且バラモン教の教主を兼ねて居た。セールス姫の從兄にセウルスチンと云ふ美男子があつた。これはホーロケースの獨息子である。

茲にセールス姫の發起にて、泰安の館を改築し、城塞を築き、國民を使役し、殆ど三年を費わして漸くにして宏大なる城廓は築造された。何時の間やら、セウルスチンとセールス姫の間には怪しき糸が結ばるゝ事となつた。セウルスチンは殆ど城中に坐臥し、セールス姫の背後に在りて、凡ゆる暴政を行はしめた。

茲に城内の重臣共はセウルスチンの傍若無人なるに愛想をつかし、怨嗟の聲城の外に溢るるに至つた。國內は各所に騷擾勃發し、掠奪鬭争日々に行はれ、亂麻の如き状態となつて了つた。茲に心有る正しき人々は、泰安城を窺に脱出して、遠く玉藻山の聖地に逃れ、眞道彦命、ヤーチン姫の教に従ひ、花鳥風月を友として、時の到るを待つ者踵を接するに至つた。

泰安城にはセウルスチンの意を迎へて、我身の名利榮達を望む悪人のみ跋扈し、政

教は日に月にすたれて、殆ど收拾す可らざるに至り、國內の各地には革命の煙花上つて、騷擾を起し、民家を焼き、婦女を辱め、財物を掠奪し、亂暴狼籍到らざるなく、恰も餓鬼畜生修羅道を現出せし如く、混亂に混亂を重ね、呪咀の聲は五月蠅の如く湧き充ちた。猛獸毒蛇は白晝に瀟歩し、鱷、水牛などは池、沼なきを根據とし、民家近く襲ひ來つて、人を傷つけ、國內恰も阿鼻叫喚の慘狀を呈するに至つた。され共民心を失ひたる泰安城のセールス姫を始め、サアルボース、ホーロケースの威力を以てしても、最早如何ともする事能はざるに立到つた。

泰安城は最早風前の灯火と、誰云ふとなく稱ふるに至つた。數多の國人は遠く難を避けて、アリス山を越え、天嶺、泰嶺を始め、玉藻山の聖地に避難する者日夜踵を接した。中にも

ホールサース。マールエース。テールスタン。ホーレンス。ユウトビヤール。ツール。シール。ス。エール。ハレヤール。オーイツク。ヒューズ。アンデーヤ。ニユー。ジエール。

なごの錚々たる人物はヤーチン姫を中心として三五教の幹部を組織し、表面的教理を宣布し乍ら、時の到るを待つて、泰安城の佞人輩を卻け、カールス王を城内に迎へ入れ、ヤーチン姫を元の如く妃となして、新に善政を布かん事を心私かに期待しつつ盛に教理を宣布し、新高山以北の地まで限なく勢力を扶植しつ、あつた。

セールス姫は國內の日々に亂れ行くを、我身の不心得より來りしものは夢にも知らず、セウルスチンを始め其他の邪神共の誣言を信じ、斯の如く我領内の日々に亂れ行くは全く玉藻山の靈地に、三五教の教を樹つる眞道彦命頭領となり、ヤーチン姫、

男「何れの方様かは存じませぬが、御無禮を致しました上に、生命迄も御助け下さいませして……此御恩は決して忘れは致しませぬ。私はアリス山の溪谷に住居致す樵夫の一人でムります。泰安城のセールス姫が部下の悪者に虐げられ、生命カラしく何處を當途ともなく、ここ迄逃げて参りました。斯く云ふ中にも如何なる追手が来るやも計り知れませぬ。さうぞ一時も早く私を御匿まひ下さいますまいか」と落つかぬ態に頼み入る。

日楯「汝はアリス山の溪谷に住む樵夫と聞きしが、何故セールス姫の部下に追はるゝ理由あるか。詳細に物語れよ」

となれば、其男は涙を拂ひ

樵夫「私には親一人、子一人の大切なヨブと云ふ娘が御座いました。私の名はハー

ルと申します。セウルス姫様がセールスチンと云ふ立派な大將とアリス山に數多の家來を召連れ、狩にお越し遊ばした時、我草庵に立寄り玉ひ、我娘のヨブを見て……此女を我侍女に奉れよ……と仰せられました。天にも地にも、親一人子一人の間柄、最愛の娘を泰安城内深く連れ行かれては、最早我々は一生涯親子の對面は叶ふまじと思ひました故、いろくと言葉を盡して、御断りを申上げますれば、セウルスチンと云ふ御大將の御言葉に……然らば此娘は我女房に遣はすべし……と數多の家來に命じ、無理矢理に泣き叫ぶ娘を引抱ひ、連れて行かれました。私は一生懸命後を追はんとすれば、セウルスチンは一刀を引抜き、我眉間に斬りつけ、猶も數多の家來に命じ……彼が生命を取れよ……と下知致しました。數多の家來衆は私の後を追っかけ来る。され共山途の勝手を知悉したる私は、巧く間道を通り抜け、

漸くにして此處迄逃げのびました様な次第で御座います。何卒々々早く御匿まひ下
さいませ」

と両手を合せ涙と共に頼み入る。日楯を始めユリコ姫は之を憐み、二三の従者に彼が
身邊を守らせ、天嶺の聖地に連れ歸り親切に介抱させ、漸くにして額の疵は全快し、茲
に日楯の従僕となつて忠實に仕ふる事となつた。併し此男はセールス姫が意を含めて
遣はしたる間者であつた。

ヤーチン姫やマリヤス姫の 珍の命やカールス王の

泰安館を出でしより

鳥なき里の蝙蝠と

羽振りを利かしセールス姫が 傍若無人の悪政に

居たたまらず重臣は

次第々々に逃走し

玉藻の山の靈場に

身を忍びつつ三五の

教司と身を變じ

花咲く春を待ち居たる

サアルボースやホーロケースの兩人は カールス王を淡溪の

森の彼方に放逐し

形ばかりの館を建て、

四五の部下をば派遣しつ

人の出入を警戒し

苦しめ居たるぞ忌々しけれ。 セールス姫は只一人

閨淋しさに従兄なる

セウルスチンを寢間近く

招きて秘密の謀計

酒池肉林の贅澤を

極めて民の苦しみは

空吹く風と聞き流し

あらゆる限りの暴政を

行ひければ國人は

益々塗炭の苦みに

堪りかねてか遠近の

山の尾の上や川の瀬に

三人五人と集まりて

大革命の謀事

目引き袖引き語り合ふ

暗夜とこそはなりにけれ。

ヤーチン姫やマリヤス姫の

珍の命は國內の

此惨状を耳にして

心は矢竹と逸れども

詮術もなき今の身の

神に祈りて木の花の

開くる春を待つばかり

松の名に負ふ高砂の

胞衣と聞わし此島も

今は果敢なき曲津身の

荒ふる世とはなりにけり

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませと

朝な夕なに真心を

こめてぞ祈る神の前

眞道彦を始めとし

日楯、月鉦諸共に

日月潭の湖に

朝な夕なに禊して

高砂島の安泰を

只管祈る真心は

いつしか願ひ龍世姫

國魂神の功績に

常夜の暗も晴れ渡り

天津御空に日の神の

影も豊に昇りまし

神の御稜威も高砂の

尾の上の松の末永く

榮ねよ榮ね何時迄も

世は平けく安らげく

治まりませと一同が

朝な夕なの神言を

神も諾なひ玉ふらむ

あゝ、惟神々々

御靈幸はひましくて

三五教の御教を

此神島に限もなく

完全に委曲に宣り傳へ

昔の神代の其儘の

清き心に上下の

司も民も陸び合ひ

榮ね久しき松の世を

來させ玉へと真心を

こめて祈るぞ尊けれ。

セールス姫の間者として入り込みしハールを始め、其外數名の間者、日月潭を始め玉藻の山の聖地に入り込みたる件は、一々述ぶるも、くどくどしければ、今は之れを略し事の序に述ぶる事と致します。

(大正一一、八、六、舊六、一四、松村眞澄録)

第二篇 暗黒の叫 (一四)

第七章 無痛の腹（ハ〇七）

泰安城はセールス姫、サアルボース、ホーロケース、セウルスチン等の横暴極まる悪政に、國民怨嗟の聲は、日に月に高まり來り、漸く革命の機運熟す。シヤーカータルの一派ミトロレンスの一派は、東西相呼應して、泰安城に攻め寄せ、今やセールス姫以下の身邊は、最も危急の地に迫つて來た。此事早鐘の如く臺灣全島に響き渡り、玉藻山の聖地には一しほ早く或者の手より其真相を報告された。

茲にヤーチン姫、眞道彦命の部下に仕へたる神司、ホールサース、マールエース、テールスタン、其他數多の幹部連は入尋殿に集まつて、此度の泰安城に於ける大革命的騷擾に對して、如何なる處置を取るべきかを協議した。

眞道彦命を始め、日楯、月鉾は入尋殿の中央なる高座に現はれて、此會議を監督する事となつた。

ホールサースは、先づ第一に高座に登り、一同に向つて開會の挨拶を述べ、徐に降壇した。次でマールエースは、今回の恰も議長格として意氣揚々と登壇し、一同に向ひ

「皆様、今日此入尋殿に炎暑を構はず、御集會下さいましたのは、我々發起人として實に感謝の至りに堪へませぬ。就きましては諸君に於いても略御承知の通り、セールス姫其他の暴政に依つて、國民塗炭の苦しみを受け、今や此苦痛に堪へ兼ねて、新進氣鋭の國民の団体は、シャールカルタン、トロレンスの首領に引率され、泰安城へ攻め寄せたりとの事で御座います。承はればシャールカルタン、トロレンス

はバラモン教の錚々たる神司の事、彼破竹の勢を以て泰安城を乗り取り、又もやバラモンの暴政を布くに於ては、世は益々混亂に混亂を重ね、遂には三五教の聖地迄も蹂躪され、我々は此島より放逐されねばならなくなるのは、火を赭るよりも明かな事實で御座いませう。これに就て私は考へます……一日も早く三五教の信徒を率ゐ、泰安城に向つて言靈戦を開始し、シャールカルタン、トロレンスの一派を言ひつけ、三五教の部下となし、其機に乗じて全島の支配權を握らば、三五教は萬世不易の基礎が建ち、又國民も泰平の恩恵に浴する事と考へます。……皆さんの御意見は如何で御座いませう。どうぞ此演壇に登りて、御感想を述べて頂きたう御座います」

と言つて、壇を降り我席に着いた。此時肩を揺り兩手の拳を握り締め、堂々として登

壇したのはテールスタンであつた。満場を睥睨し乍ら聲を勵まして言ふ

「この聖地は遠き神代より、眞道彦命様の遠祖茲に鎮まり玉ひ、至仁至愛の三五教を樹立し、無抵抗主義を遵守して、こゝに國魂神の神力を以て數多の國民を教へ導き玉ひつゝ、多く年所を経給ひました。併し乍ら、餘り極端なる無抵抗主義の爲に追々其領域は狹められ、僅に日月潭の附近にのみ其勢力を維持して居られたのは、諸君も御承知の通りで御座います。然るに泰安城に於てセールス姫を中心とする悪人輩の日夜の行動に慄きたらず、我々始め此席に列し玉ふ幹部の方々は、顯要の地位を棄て、現世的に無勢力なる此聖地に集まり、信仰三昧に入り、殆ど政治慾を絶つて、花鳥風月を友となし、其日を送り來りしも、決して無意味に我々は光陰を費やして居たのではありませぬ。時來らば國家の爲に全力を發揮し、カール

ス王を助けて、元の地位に復やし奉り、完全無缺なる神政を布き、再び元の地位に立たんと欲するの念慮は一日も忘れた事はありません。諸君に於ても、此席に列せらるゝ方々は、十中の八九迄元は泰安城の重要な地位に立たせ玉ひし方々なれば、我々も御同感なるべし。我々此聖地に來りてより、三五教は蘇生せし如く、日々に隆盛に赴きたるも、全く人物の如何に依る事と考へられます。諸君は瀕死の境にありし三五教をして、斯の如く隆盛に赴かしめたる能力者で御座いますれば、キツと此腕前を活用して泰安城に向ひ、シャールカルタン、トロレンスの向うを張つて、此際一戦を試み、セールス姫を言向け和し、且又シャールカルタン、トロレンスの一派を我等の言靈に歸順せしめ、全島の政教兩權を掌握するは、此時を措いて何時の日か來るべき。曠日、彌久徒に逡巡して、彼等に先を越されなば、我々は

何時の日か頭を擽ぐるを得られませうか。何卒皆様に於ても御熟慮……否御即考あつて、速かに御賛成あらん事を希望致します」

と云ひ終つて悠々壇を降る。拍手の聲は雨霰の如く場の内外に響き渡つた。

此時末席よりセールス姫の間者として入り込み居たる、ハールは壇上に現はれ

ハール「皆さんに、末席の我々恐れけもなく、此高座に登りて、御意見を承はりたし

と斯く現はれました。マールエース、テールスタンの幹部方の御意見は、末輩の私に於ても、極めて賛成を致します。就いては三五教の信徒を以て言靈軍を組織し、

泰安城へ攻め寄せ玉ふ目的は此度の暴動を鎮定し、シヤールカルタン、トロレンスの一派に對して痛棒を加ふるにあるか、但はセールス姫を中心とする泰安城の重役に對して、大痛棒を與ふるの覺悟で御座るか、此點を何卒明瞭に御示し頂きたう御座い

ます。先づ出陣に先立ち、敵を定めておかねばなりません」

と心ありけに述べ立てた。此時ホールサースは再び壇上に現はれて言ふ。

ホールサース

「天は必ず善人に組す。我々は正義の爲に戦ふのである。セールス姫にして悪ならば、彼を懲し、又善ならば彼れを輔けん。シヤールカルタン、トロレンスにして其目的、國家民人の爲ならば我は彼を助けむ。未だ何れを善とも惡とも定め難し。さり乍ら、カールス王の御病氣を楯に、淡溪の畔に小さき館を造り、之を幽閉し、セウルスチンの如き賤しきホールゲースの悴を重用して、惡政を布くセールス姫の行動に居たたまらず、我等一同は此聖地に逃れ來りし者なれば、此度の大騒動も其原因は、セールス姫一派の暴政に依りて勃發せしものたる事は察するに餘りあり。要するに此度の神軍はカールス王を御助け申上げ、再び元の泰安城に立て直す目的と思

へば間違なからうと思ひます」

とキツバリ言つて扱けた。ハールは再び口を開いて

ハール「此度の神軍幸にして勝利を得、カールス王を救ひ出だし、再び王位に立たしめなば、セールス姫を正妃となし玉ふ御所存なるか。但はヤーチン姫を以て正妃と定め玉ふ考へなりや承はりたし」

と呼はつた。ホーレンスは始めて登壇し、

ホーレンス「我々の考ふる所は、カールス王を救ひ奉り、ヤーチン姫を正妃となさん事を熟望して居ります。そうなればカールス王もヤーチン姫も日頃の思ひが遂げられて、圓滿に政事が行はれ、國民の父母と仰がれ玉ふ瑞祥の來る事と信じて居ります」

ハール「ヤーチン姫様は最早昔とは御心が變つて居る様に思はれます。此事は第一教主

の眞道彦様の御意見に依らねばなりません。一般の噂に依れば、内面的に御夫婦の關係が結ばれ居ると云ふ事、むしろ神軍の勝利を得たる曉は、眞道彦様を政教兩面の主權者となし、ヤーチン姫様を其妃と公然遊ばしたら如何で御座いませう。その方が餘程治まりが良き様に考へられます」

テールスゲン「我々は要するに泰安城の主權者を選び其幕下に仕へて元の位地に歸りさへすれば良いのである。主權者がカールス王であらうと、眞道彦命であらうと、問ふ所ではありませぬ。我々の考ふる所では、眞道彦命様必ず心中に泰安城の王たるべきことを御期待遊ばされある事と確信致し、泰安城を棄て、茲に集まつて來た者で御座います。眞道彦命様にして、只單に教法上の主權者を以て甘んずるの御意志ならば我々は元より斯様な所へ首を突込む者ではありません。諸君に於かせられて

も、我々も同感ならむと察します」

一堂は拍手の聲に満たされた。

眞道彦は憤然として身を起し、壇の中央に現はれ、慨歎の情に堪へざるもの、如く、暫くは壇上に目を閉ぎ悄然として立つた儘、兩眼よりは涙さへ流して居る。漸くにして口を開き

眞道彦「只今の幹部方の御話を聞き、此眞道彦に於きましては、實に青天の霹靂と申さうか、寢耳に水と申さうか、驚きと慨歎とに包まれて了ひました。世の中に誤解位恐ろしきものは有りませぬ。各自の心を以て人の心を推し量ると云ふ事は、實に對者たるもの恐るべき迷惑を感じます。我々は祖先以來、國魂の神を齋り、三五教の教を確く遵守し、少しも政治に心を傾けず、萬民を善道に教化するを以て最善の

任務と衷心より確く信じ、且つ神慮を萬民に傳ふるを以て、無限の光榮と存じて居ります。然るに只今の幹部方の御意見を承はり見れば、私を以て政治的救世主の如く思つて居られるやうで御座います。又王族たるヤーチン姫様と私の間に、何だか怪しき關係でも結ばれある様な語氣を洩されました。私は實に心外千萬でなりません。さうぞ三五教の精神と、我々の誠意を能く御諒解下さいまして、大悲の大神様の御旨に叶はせらるゝ様、神かけて祈り奉ります。重ねて申して置きますが、決して此眞道彦は物質的の野心も無ければ、政治的慾望は毫末も有りませぬ。又皆様に推されて政治的權威を握らうとは、夢寐にも思ひませぬ。此事は呉々も御承知をして頂きたう御座います」

と云ひ終り、撫然として、我居間に姿を隠した。眞道彦の退場に連れて、日楯、月鉾

の兄弟も亦満場に見送し、悄然として父の後に従ひ此議席を退場して了つた。

後には氣兼ねなしの大會場は口々に勝手な議論が沸騰し出した。セールス姫の間者として豫てより入り込み居たりしカントンと云ふ男、忽ち壇上に現れ衆に向つて言ふ。

カントン「皆さん、只今眞道彦命が仰せられた御言葉、何と御觀察なされますか。我々の貧弱なる智識を以て教主の御心中を測量致すは、少しく嗚呼の沙汰では御座いますが、あの御言葉は、我々は心にも無き騙言を云つて居られるのだと思ひます。政治的に野心は毛頭無いと仰せられたのは、要するに大に有りといふ謎で御座います。注意周到なる教主はセールス姫の間者、もしや信徒に化て忍び入り居るやも知れずと心遣ひ、……ヤアもう英雄豪傑の心事は容易に計り知れないもので御座います。我々はキツと眞道彦命、泰安城に現はれ、自ら主權者となり、最愛のヤーチ

ン姫を妃として君臨せんと心中企畫し居らるゝ事は、少しも疑ふの餘地なき事と確く信じます。幹部の方々の御意見は如何で御座いまするか」

一同は「賛成々々、尤も／＼」と拍手して迎へた。カントンは得意の鼻を掻かし乍ら兩手を鷹揚に振りつゝ、壇を降りて自席に着いた。

幹部の一人と聞けたる頑固派の頭領株エールは、慌しく壇上に立上り

「我々は素より泰安城の重臣としてカールス王に仕へ、殊恩に浴したる者、然るにサアルポース、ホーロケース一派の悪臣の爲に、大恩あるカールス王を御病氣を楯に、淡溪の畔に幽閉し奉り、悪鬼の如きセールス姫の權を恣にし、暴虐日々に増長し、無念の涙やる瀬なく、如何にもしてカールス王を救ひ奉り、元の泰安城に立直さんと肺肝を碎きつゝあつた者で御座います。然るに天の時未だ到らず、涙

を呑んで時の到るを待つ内、此玉藻山の聖地に、現幽二界の救世主現はれたり聞き、城内を脱出して、茲に三五教の信徒となり、幹部に列せられ、時を得てカールス王の爲に全力を盡し、忠義を立てんと決意し、顯要の地位を棄て、無抵抗主義の三五教に身を寄せて居たのであります。併し乍ら我々日夜眞道彦の舉動を偵察するに、畏れ多くもヤーチン姫を怪しき交際を結ばれたる如く感ぜられ、憤怒の情に堪へませぬ。又一般の噂もヤハリ教主とヤーチン姫との交際の點に就て、ヒソヒソと怪しき噂が立つて居ります。火の無い所には決して烟も立つものではありませぬ。これに付いて我々は考へまするに、教主は最早ヤーチン姫を内縁の妻となし居らるる以上は、假令カールス王を救ひたりとて、一旦汚されたるヤーチン姫をして、堂々と王妃に薦めまつる事は、我々臣下の身として忍びざる所で御座います。又教主はヤ

ーチン姫を自己築籠中の者となし、カールス王を排斥して自ら治權を握る野心を抱藏するは、一點疑ふの餘地は無からうかと信じます」

と憤然として壇上に雄健びし、足踏みならして鼻息荒く降壇した。

カントンは再び壇上に上り

「我々は時節の力と云ふ事を確く信じて居る者で御座います。泰安城の主權者が、カールス王だらうが、眞道彦命であらうが、但はセールス姫であらうが、國民の歡迎する主權者であれば良いので御座います。天下公共の爲には些々たる感情の爲に左右されてはなりません。只今エールさんの御言葉は一應御尤もでは御座います。それはエール其人を本位としての議論であつて、天下に通用しにくい御話だと思ひます。カールス王に殊恩を蒙つた其御恩に酬るん爲に、種々と肺肝を碎かせ

らるるは、それは主従としての關係上、主恩に酬るんとする真心より出でさせられたる感情論であつて、言はば乾兒が親分の最負をする様なものであります。國民一般より見れば餘り問題とならない議論だも、私は思ふのであります。我々の如き無冠の太夫は別にエール様の如く、特別の恩寵を被つた覺れもなければ、又カールス王に對して一片の根みも持ちませぬ。唯此際は國家の爲に善良なる主權者を得、萬民鼓腹擊壤の享樂を得る様に、世の中が進みさへすれば、それで満足であります。諸君の御考へは如何で御座いますか。小田原評定にあたら光陰を空費し、時機を失するよりは、手取早く話を決めて、早く救援に向はねば、國家は益々修羅の巷の慘狀を極め、國民の苦しみは日を逐うて烈しくなるでせう。何は兎もあれ、出陣か非出陣か、一時も早く諸君の誠意に依つて御決定を願ひます」

と言ひ終るや、以前のエールは烈火の如く憤り、忽ち壇上に駈上がり、辯者の面上を叩がけて鐵拳を亂打した。満場總立ちとなつて

「ヤレ亂暴者を捉へよ」

とひしめき立つた。エールは敏捷にも混亂の隙を窺ひ、何處ともなく、此場より姿を隠して了つた。

(大正一一、八、八、舊六、一六、松村眞澄録)

第八章 混 亂 戦 (八〇八)

エールは亂暴を働き、大勢に取巻かれ、進退谷まつて、捷しこくも満座總立となつて立騒いで居る人々の股をくぐり、聖地を後に、二三の知己と共に、アリス山を越え、泰安城の附近の山に身を忍ばせ、形勢如何にと窺ひつゝあつた。

一方入尋殿に於てはホールサース、マールエース、テールスタン、ホルレンス其他の幹部達は再び議論の花を咲かした。テールスタンは立上りて、決心の色を面に現はし、満座に向つて云ふ

「テールスタン 満場の諸君よ、一時も早く出陣を致さうでは御座らぬか。グツク致して居れば、シャーカルタンやトロレンスの一派の爲に、泰安城を占領せられ、彼が手に依

つてカールス王を救ひ出す事あらば、我等が今迄の希望も苦心も全く水泡に歸すべし。六莖十菊の悔を後日に残すよりは、若かず、一刻も早く衆を率ゐ、破竹の勢を以て、旗鼓堂々泰安城に押寄せ、セールス姫の一派を撃退し、且つカールス王を救ひ、シャーカルタン、トロレンスの一派に先鞭をつけ、本島の統治權を掌握致すは、今を措いて又とある可らず。千載一遇の此好機、躊躇逡巡して、後日に呑噬の悔を残す事勿れ。如何に眞道彦命、表面無抵抗主義を唱へ給へばとて、決して其本心には非ざるべし。先んずれば人を制すとかや、我等率先して衆を引率し、泰安城に立回ひなば、眞道彦命も、ヤーチン姫も必ず承諾し玉ふべし。三五教の教主として、あらはに神軍を率ゐ、泰安城の主權を握らんならば口外し玉はざるは當然である。そこは我々幹部たる者一を聞いて十を悟るの知識なかる可らず。學古

今を絶し、識東西を貫き玉ふ教主にして、目前に落下し來る此天運を袖手傍觀して受入れ玉はざるの理あらんや。不肖乍らテールスタンの觀察は謬りますまい。皆様、何卒御賛成を願ひませう」

一同は何もなく心勇み、歡聲をあけ、賛意を表した。

茲にホールサースを大將と仰ぎ、マールエース、テールスタンを副將とし、日月潭の信徒を加へて、殆ど三萬有餘人、竹槍を携へ、愈時を移さず、泰安城に立向ふ事となつた。

眞道彦命は大に驚き、一同に向つて我意にあらざる事を言葉で盡して、説き明せ共、逸り切つたる數多の人々、眞道彦の言葉を却て逆に取り、容易に一人として其命に従ふ者はなかつた。眞道彦は止むを得ず、幹部其他に推されて出陣する事となつ

た。日楯、月鉾の兄弟を天嶺、泰嶺の兩所に殘し、玉藻山の聖地にはヤーテン姫、マリアス姫をしてこれを守らしめ、馬上豊に衆を率ゐて、心ならずも泰安城に向ふ事となつた。あゝ眞道彦命の運命は如何なるであらうか。

先に逃走したるエールは、セールス姫の間者として玉藻山に忍び入り込みたるマルチル、ウラール、キングス、トーマス、マーシヤル等の一味と共に、數十人の部下を集め、アリス山の北麓に、眞道彦の神軍の到るを待伏せて居た。先頭に立つたるテールスタンはこれを見て大音聲

「ヤア、エール、汝は聖地を脱出し、少數の一味の奴原を引率し、我等が大軍を待討たんとするか。弱少の味方を以て、雲霞の如き大軍に抵抗せんとするは、實に險呑千萬であらうぞ。それよりも悔い改めて、再び我軍に加はり、共に／＼拔群の

功名を致さうではないか」

と教ゆる様に言つた。エールは笑顔を以てこれを迎へ、つかくエールスタンの前に近づき、堅く手を握り、兩眼より熱涙を落し乍ら

エール「あ、テールスタンよ、よくも云つて下さつた。一時の怒りより聖場を脱出し、泰安の都近く立歸つて見れば、シャーカルタンやトロレンスの勢、頗る猖獗にして侮る可らず。我等少數の味方を以て彼等に當ることも、何の効果もなきのみか、却て自ら滅亡の淵に飛び込む如きもので御座る。それに付いても、カールス王の御身の上、サアルボースの一派、淡溪の館を十重廿重に取巻き、シャーカルタンの寄手に向つて玉を奪はれまじと厳しく警固し居れば、王の命は早旦夕に迫れり。思ふにセールス姫一派は、シャーカルタン等にカールス王を奪はれ、これを擁立して泰安城に

新しき政事を布くならば、我等一派の一大事と心得、王を寄手に渡さじと全力を籠めて守り居るもの、如し。さり乍ら寄手の勢益々猛烈にして、到底守る可らざるを知らば、サアルボースの一派は後難を恐れて、王を弑し、遁走するやも計り難しこれを思へば一刻も猶豫す可らず。何卒三五教の神軍の一部を我に賜はらば、王の生命は安全に守り奉る事を得ん。曲げて此儀御許しあれ」

と言葉を盡して頼み入る。テールスタンは直ちに自己の率ゆる神軍を以てエールの請ふが儘に、淡溪の王が館に應援の爲、出で向ふ事となつた。

淡溪の館にはサアルボースの部下の者十重二十重に取巻き王の警固に當つて居る。トロレンスの一隊は淡溪の館に攻め寄せ、王を奪はむとして、サアルボースの部下と衝突し、互に一勝一敗、死力を盡して戦ひしが、寄せ手の勢刻々に加はり、サアル

ボースは最早身を以て免るゝの餘儀なきに立到つた。カールス王を敵手に渡しては、後日の爲に面白からずと、今は覺悟を極め、王に向つて自殺を逼り、萬一肯んぜざれば、サアルボース自ら手を下して、王を弑せんとする折しもあれ、何處よりともなく一塊の大火光飛來して、サアルボースの前に爆發し、大音響を立てた。サアルボースは忽ち失心して其場に倒れた。

トロレンスの寄手は勝に乗じて早くも館内に亂入せんとする。時しもあれ、テールスタン、エールの率ゆる竹鎗隊は雲霞の如く関を作つて此場に現はれ來り、忽ち寄手に向つて遮二無二突込めば、トロレンスを始め全軍狼狽の結果、泰安城を指して敗走して了つた。

サアルボースは漸くにして正氣づき、あたりを見れば、トロレンスの寄手は影もな

く、それに代つてテールスタン、エールの三五軍の襲來せるに再び肝を潰し、僅に身を以て此場を逃るゝ事を得た。テールスタン、エールはカールス王の前に出で、恭しく手を仕へて王の危急を知り、遙々救援に向ひし事を奏上した。王は立つて兩人が手を固く握り、涙と共に感謝の辭を與へた。

これより二人は王を奉じ、淡溪を溯り新高山の岩窟を假りの城塞となし、テールスタンは一軍の半を削いて泰安城の攻撃に向ひ、残りの神軍はエールこれを統率し、王の身邊を堅く守り、時機を窺ひつゝあつた。これよりテールスタン、エールの二人はカールス王の殊寵を蒙り、得意の時代に見舞はるる事となつた。



一方泰安城にてはセールス姫、セウルスチン、ホーロケースの大將株、城内の兵を

指揮し、華々しく立働き、容易に落城せず。寄せ手のシャーカルタンの攻軍も素より烏合の衆なれば、稍厭氣を生じ、内訌を起し、内部より瓦解せんとする危急の場合であつた。

此時激湍より逃げ去つたるサアルボースは、散亂せる味方を集め、應援の爲に此場に集まり來る民軍の勢は稍回復し、此機を逸せず一舉に攻め寄せんと城塞を攀ち、亂入せんとする時しも、テールスタンの率ゆる一隊、後方より圍を作つて攻めよせ來り民軍は内外より敵を受け、再び窮地に陥り最早敗走の餘儀なき立場となつた。此時後方より眞道彦命の率ゆる大軍は、ホールサース、マールエースと共に軍を三隊に分ち、三方より泰安城に攻寄せ來る。此勢に僻易し、セールス姫、セウルスチン、ホーロケース、サアルボースも又寄せ手の民軍も、敵味方の區別なく、雪崩の如くに敗

走して了つた。

茲にテールスタンの率ゆる三五軍と、眞道彦命の率ゆる三五軍とは、ゆくりなくも大衝突を來し、テールスタンは形勢非なりと見るより、部下と共にカールス王の臨時の城塞に引返し、虚實交々眞道彦命の暴狀を進言した。カールス王は怒り心頭に達し、如何にもして眞道彦一派を滅さんと、腕を扼し、齒を喰ひしほり、怒りの涙ハラ〜と流し、無念さを堪へて居た。

一方眞道彦命の神軍は悠々として泰安城に進み入り、眞道彦命を始め、ホールサース、マールエースの副將以下、ホールレンス、ユートビヤール、ツールレンス、シリンス、ハーレヤール、オーイツク、ヒューズ、アンデーヤ、ニエヂエール其他の勇將と共に、チユーリックを脱ぎ捨て戦勝の酒宴を催し、數多の軍卒を稿ふた。城内の

奥殿には三五教の大神を齋り、戦勝の禮代として各神殿に音楽を奏し、舞曲を演じ、神慮を慰め、城内は忽ち天國樂園の如くになつて來た。

眞道彦命はホールサースに命じ、玉藻山の聖地に在るヤーチン姫、マリヤス姫を奉迎して泰安城に歸らるべしと、信書を持たせ、急遽、聖地に遣はした。又一方カールス王の御在處を探り得たれば、マールエースをして少しの從者と共に、王を泰安城に奉迎せしめんと、急ぎ派遣した。

ホールサースはヤーチン姫、マリヤス姫を首尾克く迎へ歸りたれ共、何故かマールエースは旬日を経れ共歸り來らず、何の音沙汰もなきに不審を抱き、此度はホールエースをして再び、王を迎ふべく、王の陣所に差し向けた。これ又幾日を経るも何の音沙汰無ければ、ユートビヤール、ツレーレンス、シーリンス、ハレーヤールをして王を迎ふ

べく差し遣はした。され共これ又何の音沙汰も無かつた。

茲に眞道彦命は稍不安の念に驅られ乍ら、此度はヤーチン姫を促し、自ら王の隠れ家に到りて、泰安城に奉迎せんとし、マリヤス姫其他に城を守らしめ、淡溪の上流なる王の陣屋に自ら出張したのである。

(大正一一、八、八、舊六、一六、松村眞澄録)

第九章 當 推 量 (八〇九)

テールスタンは泰安城に於て、眞道彦命の神軍より手厳しく撃退されたる無念を晴らさんが爲に、エールと共にカールス王に向つて口を極めて、眞道彦命一派を讒訴した。

眞道彦命は斯かる王の怒りに觸れ居ることは夢にも知らず、マールエースをして王を泰安城に迎へんと、誠意をこめて遣はしたるにも關はらず、エール等の讒訴を固く信じたるカールス王は容易に怒り解けず、眞道彦の使者を悉く牢獄に投じ、日夜エールをして厳しく訊問せしめつゝあつた。眞道彦命は幾度使を遣はすも、一人として歸り來らざるに不審を抱き、ヤーチン姫と共に、王の陣屋に伺候し、誠意をこめ

て王を泰安城に迎へんと、遙々訪問した。

手具脛ひいて待つて居たエール一味の者は、有無を言はせず、ヤーチン姫、眞道彦命を牢獄に投じ、日夜訊問を續くるのであつた。第一に王の前に堅く両手を縛められて引出されたるはマールエース、ホーレンスの二人であつた。正面にはカールス王は閻羅王の如く嚴然として眼を光らせ、エール、テールスタンは左右に赤面をさらし、目を怒りして、訊問の矢を放つてゐる。王はマールエースに向ひ

カールス王「汝は玉藻山の聖地に永らく入り込みて、眞道彦命と何事かを企畫しつゝありしと聞く。委細を詳さに陳辯せよ」

と厳しく問ひかけた。マールエースは

マールエース「ハイ私は王が御病氣の爲、淡溪の館に御退去の後にはセールス姫、セウルスチン其

他の悪人輩の行動、見るに忍びず、時を待つてカールス王様の御親政に復歸し奉らむと心を決し、玉藻山に身を逃れて、時機の到るを待ちつゝありましたので御座います。然るに此度泰安城の大變事聞き、王の御身邊を危み、救援の爲に神軍を率ゐりました。外にそれ以上の目的も何も御座いませぬ。何卒公平なる御判断を願ひ奉ります」

カールス王「汝の申す事、よもや間違はあるまい。それに就いて、汝に尋ねたき事がある。

ヤーチン姫と眞道彦命二人の間の關係は存じて居るや」

「ハイ御兩人共忠實に御神務に奉仕されて居られました。別に噂のほつて居る如き醜關係は、私としては認められませぬ」

カールス王「テールスタンやエールも永らく汝の如く聖地に入り込んで、幹部に列して居た

者、彼れ兩人の言ふ所に依れば、眞道彦はヤーチン姫と怪しき關係を結び、時を得て泰安城を占領し、臺灣島の主權を握り、自ら王と稱する計畫を立て、居つたではないか。斯の如く歴然たる二人の證人ある上は、隠すも無駄であらう。有態に白狀せよ」

「眞道彦命に限りて、決して左様な政治的野心も、又醜行も、毛頭御座いませぬ。三五教の古來の主義として、教主たる者は政治的野心を持つ可からずと云ふ厳しき掟が御座います。信心堅固なる眞道彦命に於て、如何して左様な御心を抱かれませう。全く人々の邪推より出でたる噂で御座いますれば、何卒神直日大直日に見直し聞直し、公平なる御判断を願ひ奉ります」

王は烈火の如く憤り

カールス王「汝、マールエース、其方は眞道彦と心を協せ、泰安城を占領し、政治の全權を握り、且つ我れを排斥せんどの惡虐無道の一類であらう。……ヤア、エール、一刻も早くマールエースが事實を白狀致す迄、牢獄に投じ、水責め火責めの責苦に會はしても、事實を吐露せしめよ」

エールは傍の從卒に命じ、目配せすれば、從卒はマールエースを荒々しく引立て暗黒なる牢獄の中に投込んで了つた。

續いてホーレンスに向ひ

カールス王「汝はホーレンス、久しく玉藻山の聖地に参り居りし者、エール、テールスタンの申した事に間違はあるまいなア」

ホーレンス「ハイ決して間違は御座いますまい。ヤーチン姫様と眞道彦命の醜關係は、

私は實地目撃は致しませぬが、これは随分喧しき噂で御座います。御兩人の間柄はつまり公然の秘密も同様、三歳の童兒に至る迄知らぬ者は御座いませぬ」

カールス王「眞道彦はヤーチン姫と關係を結び、將來は泰安城の國王となり、ヤーチン姫を妃とし、日頃の野心を遂行し、且つ此カールスを目の上の瘤と忌み嫌ひ、排斥せんどの計畫を立て居りしと云ふ事、事實であらうなア」

ホーレンス「ハイ、夫も私の考へでは事實だと信じて居ります。此度神に仕ふる身であり乍ら數多の部下を引率し、泰安城へ救援の名の下に攻寄せ來りしは、全く王者たらんどの、野心より起つたる出陣と考へるより途は御座いませぬ」

王「あ、そうであらう。其方は正直な奴だ。サア只今より縛めの繩を解いてやらう」
エールは從卒に命じ、ホーレンスの縛めを解いた。ホーレンスは大いに喜び、三拜

九拜して、王の意を迎ふる事のみ熱中し、夫が爲に眞道彦命の冤罪は容易に拭ふ可らざるものとなつて了つた。

續いてユートビヤール、ツールレンス、シーリンス、ハーレヤール其他數多の嫌疑を受けて投獄されたる三五教の幹部は、ホーレンスと略同様の陳述をなし、遂に縛めを解かれ、再び王の寵臣として深く用ゐらるゝ事となつた。

茲にカールス王はエールをして此岩城の總監督たらしめ、且つ眞道彦命、ヤーチン姫を牢獄につなぎ、數多の從卒をして監視せしめつゝ、テールスタンの部下を引率れ、數多の幹部と共に、泰安城に堂々として乗り込んだ。此勢に眞道彦の率ゐ來れる神軍を始め、マリヤス姫は思ひ／＼に遁走し、再びアリス山の東南方に避難する者、或は各自の郷里に歸りて、何喰はぬ顔にて樵夫、耕しなどに従事し、暫くは玉蓮

山の靈地にも、大部分足を向けなくなり、カールス王の威力と眞道彦教主の投獄とに萎縮して、一時三五教は火の消わたる如く淋しくなつて了つた。

カールス王は再び泰安城の城主となり、テールスタンを宰相とし、其他の一同を重用して、萬機の政事を執行行ひつゝ、あつた。され共何となく國內の情勢は穩かならず、サアルボースはセールス姫を奉じて、日ならず泰安城へ攻來るべしと、シヤールカタン、トロレンスの一派、同志を集め捲土重來、再び戦闘は開始さるべしと、種々雜多の噂にて持切つて居た。されどカールス王はテールスタン以下の重臣の甘言に誤られ、少しも國內の不穩なることを知らず、天下は無事太平にて、國民はカールス王の徳に悦服するもののみ確く信じつゝあつた。

テールスタン、ホーレンス、ユートビヤール、其他の重臣は王に諂ひ、下を虐げ、

我利我慾にのみ耽り、バラモンの神を祀り、今迄信じ居たりし三五教を塵芥の如く振棄て、新高山以北の地には、再びバラモンの教を布き、以て國政の補助となしつゝあつた。國民怨嗟の聲は以前に倍加して、何時動亂の勃發するやも計り難き危機に迫りつつあつた。

(大正一一、八、八、舊六、一六、松村眞澄録)

第一〇章 纏れ 髪 (八一〇)

眞道彦命の教主を始めヤーチン姫は、淡溪の上流なる岩窟の牢獄に投ぜられ、數名の幹部は銚を逆さまにして、カールス王に取り入り、暴政を振ひ、其勢ひ猛烈にして何時如何なる難題を此聖地に向つて持込み來るやも計られず、且つ數多の信徒は殆ど離散し、寂寥の氣に包まれ、日楯夫婦を始め、月銚は心も落ちつかず、薄氷を踏む如き心地し乍ら、ヤーチン姫始め、父の冤罪の一日も早く晴れん事を、朝夕神前に祈願しつゝあつた。忽ちユリコ姫に神懸りあり、詞おごそかに宣り玉ふよう

「汝日楯、月銚の兄弟よ、眞道彦命の此度の奇禍は、すべて神界の經綸に出でさせ玉ふものなれば必ず案じ煩ふ勿れ。頓て晴天白日の時來るべし。眞道彦命、此

度の遭難なくば、到底三五教の救世主としての任務を全うする事能はず。今日の悲しみは後日の喜びなり、必ずく傷心する事勿れ。是れより汝兄弟は、ユリコ姫を伴ひ、暗夜に乗じて聖地を去り、荒波を渡りて、琉球の南島に在る三五教の神司兼國王たる照彦、照子姫の許に到り、事情を打明かし、救援を求めよ。然らばカールス王の迷夢も醒め、汝が父の疑も全く晴るゝに至らん。汝兄弟は未だ年若く、如何なる艱難辛苦にも堪へ得べき能力あり。年老たる父の危難を思へば、如何なる難事に遭遇する共、物の數にも非ざるべし。今宵は時を移さず、聖地を立出で琉球の島に向へよ。中途にして種々難多の迫害艱難に遭ふ事あるとも、撓まず屈せず、勇猛心を發揮して、此使命を果すべし。我れは本島の國魂神龍世姫命なるぞ。ゆめく我神勅を疑ふな」

と云ひ終つて、ユリコ姫の神懸りは元に戻した。茲に日楯、月鉦兄弟はユリコ姫と共に、身を巡禮姿にやつし、蓑笠草鞋脚絆の扮装、金剛杖をつき乍ら、人里離れし山途を辿りて遂に基隆の港を指して進むことゝなつた。

月照りわたる涼しき夏の夜を、三人は漸くにして、アリス山の頂上に辿り着き、傍の巖に腰打かけ息を休めてゐた。フト見れば、月夜の中に白く光つた菅の小笠一枚、ゆらぎつ、峠を目蒐けて登り来る。三人は目を睜り、テールスタンの部下の間者にはあらざるかと稍胸を躍かせ乍ら、心の中にて天の數歌を稱へつゝ、あつた、笠は漸く間近くなつた。見れば一人の巡禮姿の妙齡の美人である。美人は三人の憩へる前に恐るゝ近づき來り、さも懇懇に

巡禮「失禮乍ら、あなたは月鉦様の一行では御座いませぬか。妾は泰嶺の聖地に朝な夕

な仕へまつれるテールン姫で御座います」

月鉾は此聲に驚き、あたりを見廻し乍ら、聲をひそめて

月鉾

「如何にも私は月鉾で御座います。此深山を纖弱き婦人の身として、同伴もなく

只一人、御越しになるには大膽至極の御振舞、何處へ御出でになりますか」

テールン姫は涙を拭ひ乍ら

テールン

「月鉾様、何れへ行くかとは、それは餘り御胸慾で御座います。三五教の神様に心

願を掛け、ヤット叶うた妾の戀路、あなたは妾に仰せられた御言葉、最早御忘れに

なりましたか。エ、残念で御座います。そんな御心とは露知らず、互に心を變るま

じこの御言葉を神様の教示と信じ、夢にも忘れぬ妾の心、……エ、口惜しい、残念

な」

とあたり構はず、身を大地にうちつけて泣き叫ぶのであつた。月鉾は當惑顔にて、太き息をつき乍ら

月鉾

「あなたに誓つた言葉は、夢寢にも忘れは致しませぬ。去り乍ら、已むに止まれぬ

事情の爲、あなたにも委細を打明けず、俄に或秘密の用務を帯びて、暫く聖地を離

れねばならぬ事が出来ました。決して、貴女を嫌つたのでも、忘れたのでも有り

ませぬ。此月鉾が天晴れ使命を果すまで、泰嶺に歸り神妙に神様に仕へて居て下さ

い。キット貴女との約束は反古には致しませぬ。サア斯う云ふ内にも、テールンスタ

ンの部下の者共の耳に入らば、互の不覺、今の辛き別れは後の樂み、さうぞ此事を

聞き分けて、一刻も早く歸つて下さ」

テールン

「イエ、あなたはそう仰有つて、うまく妾を振棄て、泰安城に隠れますマリヤス

姫様のお側へ招かれて行かれるのでせう。何ぞ仰有つても、妾は假令火の中、水の底をも厭ひませぬ。あなたに影の如く附添ひ参ります」

月鉾「あ、困つたなア。……日楯さん、ユリコ姫さん、さうしたら宜いでせうか」

日楯「ハテ困つた事が出来ましたなア。何と云つても、今度は特別の使命が有るのだから、この所はテーリンさんに聞分けて貰つて、歸つて貰ふより仕方が有ります」

「あなた迄が腹を合はして、妾を排斥なされますか。キツト御恨み申します」

日楯「あ、あ、さうしたら良からうかなア。龍世姫様がいろくの迫害や艱難に遭ふても、捲まず屈せず、初心を貫徹せよと仰有つたが、これは又同情ある迫害に會つたものだ。情ある艱難に出會したものだ。……ナア月鉾さん」

ユリコ「もし、テーリン様、妾は女の身として、差出がましく申上げるのも、何となく耻かしく御座いますが、貴方も月鉾様と深く契合うたお仲、切なき御心は御察し申上げます。さり乍ら夫の一大事、こゝは能く嚙み分けて、一先づ聖地へ歸つて下さいませ。何れ遠からぬ内に、吉き便りをお聞かせ申すことが出来ませう」

と慰める様に、言葉やさしく説き諭す。テーリン姫は首を左右にふり

「イエ、夫が行かる、所へ、假令内縁にせよ、妻の妾が行かれない道理が有りますか。女房が行く事が出来ないのならば、あなたも日楯さんと此處で袂を別ち、泰嶺の聖地へ歸つて、神前に御奉仕なさりませ。貴女がそうなされば、妾も泰嶺の聖地へ潔く歸ります」

と拔差ならぬ理詰めに、ユリコ姫は是非なく黙り込んで了つた。

月鉾は父の危難を救ふべく、意を決して住み慣れし聖地をあとに、漸うく此處まで息せき來りしものを、戀女に追ひせまられ、耻かしさと苦しさに、五色の息を吐いて居る。

日楯「テーリンさん、貴女は最前の御言葉に依れば、泰安の城に御座るマリヤス姫様に會はんとて、月鉾さんが御出でになる様に仰有つたが、左様な氣樂な場合では御座いませぬ。我々兄弟は父上の危難を救はねばならぬ千騎一騎の此場合、さうして氣樂相に女を連れて行くことが出来ませう。まさかの時に手足纏ひになるのは女で御座いますよ」

テーリン「オホ、、、勝手な事能う仰有ります。ユリコ姫様は男で御座いますか、そして貴方と無關係の御方で御座いますか。あなた方は夫婦で御出でになつても陽氣ではなくて、妾が月鉾さんと一緒に參るのが陽氣などは、そりや又如何した譯で御座ります。此事をハツナリと妾の合點の往く様に仰有つて下さいませ。心の僻みか存じませぬが、左様な事を仰有れば仰有る程、妾は月鉾さんに見放された日より思はれませぬ。月鉾さんには、マリヤス姫と云ふ立派な戀女が御座いますから、こゝでは一人旅なれど、泰安の都迄御着きになれば、キツと二夫婦手に手を取つて、さつかへ御越し遊ばすのでせう」

月鉾「あ、持つ可らざるものは女なりけり。餘りの親切にほだされて、内縁を結んだのは今になつて見ると、チト早計だつた。あと如何したら良からうなア」

テーリン「そら御覽、我れと我手に心の底を御明かしなすつたぢやありませんか。それ程妾がうるさくて堪らねば、さうぞ此場でああなたの御手にかけて、一思ひに殺して下さ

い。そうすれば定めし、マリヤス姫も御満足遊ばし、夫婦睦じく末永く暮して下さるでせう」

と身を悶て泣きまろぶ。三人は代る／＼理を分けて諭せ共、テーリン姫は容易に承知せず、言へば言ふほど、益々疑烈しくなる計りである。

最前よりあたりの木蔭に潜んで、此悲劇を聞き居たる人影があつた。忽ち此場に現はれ、四人の前につゝ立ち

「ヤア汝は月鉦の一行であらう。最前よりこゝを通り合せ見れば、何事か人の嘯き聲、様子あらんこ木陰に立寄り、聞くともなしに聞き居れば、汚らはしや、アークス王の娘と生れたる、マリヤス姫と月鉦と夫婦の約束を結びしとか、結ぶとか、無禮千萬なる申様、妾は假令父に死に別れたりとはいへ、カールス王の妹、かゝる

尊貴の身を以て、如何に泰嶺の神司たりとはいへ、月鉦の如きに、秋波を送らんや。我れは神を信ずるの餘り、泰嶺の聖地に仕へ居れ共、決して、月鉦如きに從ひ居るものにあらず、雑言無禮、思ひこらし呉れん」

と云ふより早く、蓑の上より、骨も砕けよと計り、月鉦を打据ゑた。月鉦は一言も發せず、マリヤス姫の亂打の鞭を痛さを忍んで休へて居る。此態を見て、テーリン姫は狂氣の如くマリヤス姫に飛びつき、直に右の腕にカブリつき、一口計り肉を喰ひちぎつた。忽ち血はポト／＼と流れ出で、月夜の木蔭を黒く染むるに至つた。月鉦は此態を見て、テーリン姫の腕を後に廻し、笠の紐を以て嚴しく縛りあげた。日楯、ユリコ姫は、直におのが帯を引裂き、マリヤス姫の傷所に、土をかき集めて、塗りつけ、固く縛り、天の數歌を歌ひ、伊吹の狹霧を吹きかけた。傷は忽ち元の如くに癒はて了

た。

日楯、月鉦、ユリコ姫は此機に乗じて、足早に何處にもなく姿を隠して了つた。跡に残りし二人は稍暫し、無言の儘にて互に顔を見つめて居た。

暫くあつて、マリヤス姫は言葉を軟らげ

「貴女様はテーリン姫様で御座いましたか。不思議な所でお目にかゝりました。

何事も人間は神界の御経緯の儘によりなるものでは御座いませぬから、さうぞ心を落ちつけて、月鉦様の無事使命を了つて、泰嶺の聖地へ無事御歸りなされる日を御待ちなされませ。キツと妾があなたの望みを叶へさして上げませう」

テーリン姫は後手に縛られ乍ら、齒を喰ひしぼり、血さへ滲らして居る其形相の凄じさ。月の光に照らし見て、マリヤス姫は戀の妄執の如何にも恐ろしきものたること

に舌を巻いた。

「あなたは、妾に比べて、餘程年をとつて居られます丈あつて、實に巧妙な入目長を行られますなア。田舎の未通娘をだまさうとなさつても、私は一生懸命ですから、そんな手には乗りませぬよ。要らぬ氣休めはモウ言つて下さるな。何と仰有つても、あなたには、そんな事を仰有る資格はありません。三五教一般の喧しい噂で御座います」

「あゝ情ない事になりました。實の事を、妾は白狀致して、貴女の疑を晴らして頂かねばなりません。妾は或事情の爲、泰安城をのがれ、泰嶺の聖地に参りました。尊き神様の教を奉じ、今は神前近く仕ふる聖職となりました。一度は月鉦様に對し、妾も非常に戀慕の念を起し、いろ／＼と言ひりましたが、如何しても、月

銚様は御聞き下さりませぬ。翻つてよく考へて見れば、妾はアークス王の妾に
は申し乍ら、父が母の目を忍んで生みましたる罪の子の妾、如何して尊い月銚様の
女房になることが出来ませうか。又國治立大神様の御教を奉じ玉ふ、眞道彦命
様は、アークス王に彌増して尊き御身の上、其御方の珍の子と生れ玉ひし月銚様に、
戀慕の心を起すといふは、全く早まつた考へだに氣が付きました。其日よりフツ
リと只ひ切り、今は極めて清き心を以て神前に奉仕して居るので御座います。世間
の噂の喧しく立つたのも、元はヤツバリ妾の月銚様を戀ひ慕ふ其様子が何となく目
に立つたからで御座いませう。全く妾の罪と諦めるより仕方はありません。……と
うぞテーリン姫様、今迄の疑を私の此告白に依つてお晴らし下さいませ。貴女
は月銚様とは從兄妹同志の仲、何れも尊い神様の御胤、こんな結構な縁はないと存

じまして、妾は内々月銚様に、あなたとの御結婚を、お勧め申して居る者で御座い
ます」

テーリン姫「其のお言葉に依つて、妾も安心致しました。月銚様は父上の危難を救はねばな
らぬ大切な此場合、妾なごが此んな所へ参りまして、ゴテ〜と御邪魔をいたす場合
では御座いませぬが、つい戀の意地から貴女様の事が氣にかゝり、妬ましくなり、
最前の様な耻しい事をお目にかげました。どうぞ御宥して下さいませ。妾は月銚に後
手に縛られて居ります。どうぞ此縛をお解き下さいませまいか」

テーリン姫「あゝ、それで御座いましたか、夜分の事とて、……つい、氣が付きませなんだ」
と云ひ乍ら、テーリン姫の縛を解き、背を撫でさすり、勞り助け抱き起し

テーリン姫「サア妾も是れより泰嶺へ参りませう。泰安城には大變な事が突發致し、何時妾

に追手がかゝるかも計られませぬ。何事も運を神様に任せ、泰嶺の聖地に於て神様に奉仕し、惟神の御攝理に任す考へで御座ります。又日楯様が夫婦連にてお越し遊ばしたのも、これには特別の事情が御座いますから、聖地へ歸つた上御得心の行く様に御話し申上げませう。サア斯様な處にグツ／＼致して居りましては險呑千萬早く歸りませう」

とテーリン姫の手を取り、互に打解けて、アーリス山を降り、日月潭の湖邊を辿りて遂に玉藻山の聖地に參拜し、漸くにして泰嶺の聖地に歸り着いた。これよりテーリン姫の疑は全く晴れ、姉妹の如く相親しみ、神業に奉仕し、月鉾の歸り來るを待つて居た。

(大正一一、八、八、舊六、一六、松村眞澄録)

第一章 木 茄 子 (ハニ)

日楯、月鉾、ユリコ姫の三人は、人目を避けて峰傳ひに、アーリス山より須安の山脈を渡り、石の枕に青雲の夜具を被ぶり、幾夜を明かし乍ら、漸くにしてテルナの溪谷に辿り着いた。時しも日は山に隠れ、黄昏間近くなつて來た。茲一日二日の山中の旅行は、峰の尾の上のみを傳つて居たので、思はしき木の實もなく、食料に窮し、空腹に苦み、歩行も自由ならず、喉は渴き水は無く、弱り切つて居た。

此時遙の谷間に黄昏の暗を縫うて一塊の火光が瞬いて居る。三人は其火光に力を得、疲れた足を引ずり乍ら進んで行く。火光を中心に數多の厭らしき面構の毛武者男幾十人さなく赤裸の儘、何事か大聲に笑ひさゞめいて居た。

三人は木蔭に身を横たへ、暫し谷水に喉をうるほし、息を休めて居る折柄、サツと吹き来る谷風に揺られて三人の頭に障つたものがある。月鉦は思はず手を頭上にあひた途端に手に觸つたのは、水の滴るような木茄子であつた。三人は天の與へど喜び勇んで矢庭に木茄子をむしり、腹を拵へた。長途の疲れに腹は太り、俄に眠氣を催し、三人共其場に他愛もなく熟睡して了つた。

今日はテルナの里のバラモン教の大祭日にして、數多の里人集まり、夜祭りをなさんと、種々準備の相談をして居る最中であつた。今日の祭典に奉らむと、此里に只一本よりなき木茄子を、今迄一個もむしり取らず、大切に保存して居た。それを三人の者に残らずむしり取つて喰はれて了つたのである。愈祭典の時刻となり、四五の里人は白衣を着し、大麻を打振り、バラモン教の神歌を稱へ乍ら、大切な木茄子を

むしり取り、供物にせんじ来て見れば、大切な木茄子は何者にか盗み取られ、一個も枝に留まつて居ない。一同は驚き乍ら、あたりを透かし見れば、雷の如き駭をかいて三人の男女が傍に寝て居る。

里人は忽ち大騒ぎをなし、松明を點じ來り、よく見れば、一人の男木茄子を片手に持ち、半分許りかちつた儘、熟睡してゐる。

甲「オイ、皆の連中、大變な奴が出て來やがつて、神饌用の木茄子を、皆取つて食ひ腹をふくらせ、平氣でグウ／＼と寝てゐやがるぢやないか、怪しからぬ奴だ。……オイ誰か一時も早く此由を、テルナの會長様に報告して來い。さうせなくては俺達が取つて食た様に疑はれ、會長よりごんなお目玉を食ふか分らないぞ」

その中の一人は「オイ」と答へて、韋駄天走りに、群衆の集まる齋場に向つて會長

に報告すべく走り去つた。

甲は杖の先にて三人の頭をコン／＼と打ち乍ら

甲「コラッ、大それた大盗人奴、早く起きぬか」

と嘯鳴りつけた。三人は驚いて起きあがり四邊を見れば、松明を持つた四五人の男、傍には白衣を着けた男と共に、鬼の様な顔に團栗眼を斜き出し、唇をビリ／＼震はせ乍ら睨みつけてゐる。

日楯「何人ならば……我々三人の頭を、失禮千萬にも……杖の先にて打叩くとは何事ぞ」

と言はせも果てず、甲は毛だらけの腕を伸ばし、日楯の首筋をグツと握つた。日楯は首の千切れる様な痛さに顔色青ざめ、唇まで紫色にして苦んで居る。大の男は聲を荒らけ

大男「其方共は大方三五教の宣傳使であらう。今日はバラモン大神の大祭日、里人が大切に致して今日の祭典の供物にせうと守つて居た、木茄子を残らず取り食ひ、此聖場に於て不行儀千萬にも寝さらばひ、大膽不敵の其方等の振舞、待つて居れ、今に會長様が此場に御越しになるから、何分の御沙汰があるであらう」

と云ひ了つて、日楯の首を握つた手を放した。日楯は餘りの痛さに物をも言はず、其儘大地に獅嚙ついて苦痛を咏へてゐた。月鉾は一同に向ひ叮嚀に兩手をつき

月鉾「我々三人は決して三五教の宣傳使では御座いませぬ。バラモン教の聖場を巡拜致す巡禮で御座います。馴ぬ途にて山奥にふみ迷ひ、空腹に苦みつゝありし所、谷間に當つて一點の火光を認め、それを便りに此處まで出て参り、休息致して居る際、フト木茄子が頭に觸り、左様な大切な物とは知らず、別に盗むと云ふ心も無く、頂

戴致しました。誠に申譯のない事で御座います。さうぞ會長様に宜しく御執成しを願ひます」

甲 「今日はバラモン教の大祭日で、人間の犠牲を獻らねばならぬ大切な日である。され共人命を損するは如何にも酷だも、會長様が大神に御願遊ばし、此谷間に一歩よりない木茄子を、人間の代りとして大神様に獻りますから、人身御供文は御許し下されと御願ひになり、それから此果物は神様の御物として、里人は指をもさへず、大切に夜廻りをつけて守つて居たのだ。それを汝等三人ムザムザと取食ふた以上は、仕方がない、其方の腹中にはまだ幾分か残つて居るであらう。直に腹をかき切つて木茄子をめぐり出し、汝の體を贄として神に獻り、神の怒りを解かねばならぬ。皆の者共、其覺悟を致したがよからうぞ」

月鉾 「それは又大變な事で御座いますなア。併し神は人を助くるが神の心、人間の命を取り、或は贄を獻らせて喜ぶ様な神は誠の神ではありませんまい。我々は及ばず乍ら其神に向つて、一つ訓戒を與へて見ませう」

甲 「ナニ、馬鹿な事を申すか。神様に對して、人間が訓戒を與へるなどとは、不届き千萬な申條、左様な事を申すも、神の怒りにふれて、此テルナの里は果實稔らず、暴風雨大洪水の爲に苦しまねばならぬ。いよ／＼以て差赦し難き痴者」
と言ひ乍ら、力に任せて杖を振上げ、三人の脊骨の折れる程敲きつけた。

暫くあつて、テルナの里の會長ゼームスは四五の從者に銳利なる青龍刀を持たせ乍ら、此場に現はれ來り、三人の姿を見て、聲も荒らかに云ふ

ゼームス 「其方は大切なる果實を取喰ひし大罪人、此儘にては差赦し難し。汝等三人これよ

り神の贄とし、神の怒りを和らげなくてはならぬ。サア覺悟を致せよ」
と言ひ渡した。ユリコ姫は兩手を合せ、ゼームスの前ににじり寄り、悲しさうな顔を
あけて涙を流し

ユリコ姫「何卒、知らずくの都合なれば、さうぞ此度は御見逃しを願ひます」

と頼んだ。ゼームスはユリコ姫の顔を一目見るより、忽ち顔色をやはらげ

ゼームス「赦し難き罪人なれ共、汝は我妻となる事を承諾するに於ては、汝の生命丈は助け
てやらう。さうぢや…有難いか」

と稍碎けた相好し乍ら、ユリコ姫の顔を覗き込んだ。

ユリコ姫「さうぞ、妾のみならず、二人の男も生命許りは助けて下さいませ。それさへ
御承諾下さらば、如何なるあなたの要求にも應じまする」

會長

「イヤ、さうはならぬ。如何しても一人丈は生命を取つて、贄に致さねばならぬ
此中に汝の夫があるであらう。其方に死して、夫だけは助けてやらう」

日楯

「ゼームスとやら、我々は假令木の實を知らずくに取喰ひたればとて、汝等如き
に命を取らるゝ理由が何處にある。生命取るなら勝手に取つて見よ」

ゼームス大口をあけて

「アハ、ハ、」

と高笑ひし乍ら

ゼームス「汝、いかに神力あればとて、僅に二人や三人、此大勢の中に圍まれ乍ら。如何と
もする事は能ふまじ。神妙に其方は覺悟をきはめて贄となれ」

ユリコ姫「もしく會長様、あれは妾の夫で御座ります。さうしてモウ一人は我夫の

弟で御座います。妾は如何なる事でも承はりませう。其代りにさうぞ二人の命を御助け下さいませ」

ゼームス「あ、仕方がない。可愛い其方の申す事、無下に断る譯にも行こまい。然らば生命丈は助けてやらう。バラモン教の、今日は大祭日、兩人共烈火の中を渡り、劍の橋を越ね、釘の足駄を履き、赤裸となつて茨の叢を潜れ。これがバラモン教の第一の神に對する謝罪の途である。生命を取らるゝ事を思へば易い事である。我々は斯様な行は年中行事として、別に辛しきも思つて居ない。其方も巡禮ならば、これ位の修業は堪へられるであらう」

兩人一度に

兩人「承知致しました。生命さへ助けて頂けるならば、どんな行でも喜んで致しま

せう」

ゼームス「最早祭典の時機も迫つた。サア早く此方へ來れ。さうして裸、跣足の儘、烈火の中を渡り、神の怒りを解くがよからう」

三人の前後を大勢に警固させ乍ら、齋場に導いた。

齋場に到り見れば、數多の果物小山の如く神前に飾られ、前方の廣庭には山の如き枯柴を積み、これに火を放てば炎々として燃わあがる其凄じさ。二人は大勢の者に投げ込まれて火中に止むを得ず飛び込んだ。一生懸命に天の數歌を唱へつゝ、猛火の中を少しも火傷もせず、幾度もなく巡つて元の所に歸つて來た。一同は其神力に肝を潰し、二人の顔を眺めてゐる。

ユリコ姫は會長の俄妻として美々しき衣裳を與へられ、會長と相並んで齋壇に立つ

た。忽ち何處よりともなく、一塊の火光飛び來つて此場に爆發し、ゼームスの身体は
中空に捲きあげられて了つた。一同はこれに肝を潰し、右往左往に逃げ惑ひ、或は腰
を抜かし、顔の色さへ紫色になつて半死半生の態に呻吟して居るものもあつた。

ユリコ姫は美々しき衣裳を矢庭に脱ぎ捨て直ちに火中に投じ、日楯、月鉾と共に三
人祭壇の前に立ち、感謝祈願の祝詞を奏上し、宣傳歌を歌ひ始めた。

「朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも」

假令大地は沈む共 賊の力は世を救ふ

神が表に現はれて 善と惡とを立別る

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直せ閉直せ

身の過ちは宜り直せ

天が下なる民草は

何れも貴き神の御子

力の弱き人の身は

いかで過ちあらざらめ

賊を知らぬバラモンの

神の司のゼームスや

それに従ふ者共の

暗き心のいぢらしさ

尊き人の命を取り

神の御前に贊を

献るは何の事

果して神が贊を

望むとすればバラモンの

大國彦は曲津神

かゝる怪しき御教を

高砂島に布き擴め

國魂神の龍世姫

外所になしたる天罰は

忽ち其身に酬る來て

猛火の中を打渡り
 剣を渡り釘の下駄
 重き罪をば詫乍ら
 暮す世人の憐れさよ
 御靈幸はひましくて
 神の教の擴まりて
 海の彼方に追拂ひ
 築かせ玉へ天津神
 龍世の姫の御前に
 天に輝く日月の
 茨の叢に投げ込まれ
 穿ちて神の御前に
 樂しき此世を苦みて
 あゝ惟神々々
 仁慈無限の三五の
 怪しき教を逸早く
 至治太平の神の代を
 國津神達入百鬼
 三五教の神司
 名を負ひ玉ひし我夫の

日楯の神や月鉾の

尊き教に國人を

一人も残さず服従はせ

暗黒無道の世の中を

天國淨土と化せしめよ

あゝ惟神々々

御靈の幸を賜へかし」

と祈り終つた。何時の間にか、中天に捲き上げられたる會長のゼームスは、禮服を
 着飾り、四五の従者と共に、珍らしき果物を持ち來り、三人の前に、珍しく捧げ
 ゼームス「私は最前のゼームスと申す此里の會長で御座います。尊きあなた方等に對し、
 御無禮な事を申し上げました。勿体なくも生神様に對し、我々如き賤しき者の女房に
 なれどか、火渡りをせよと、いろくの難題を申し上げました無禮の罪、何卒御赦
 し下さいます。これも全くバラモン教の掟を遵奉致しての言葉で御座いました。只

濟まなかつたのは尊き女神様に對し、女房になれと申上げた事のみは、バラモン教の方から申しても大なる罪惡で御座います。其爲、大自在天様の御怒りに觸れ、天より戒めの大火彈を投げつけられ、私は其途端に中天に捲あけられ、最早命は無きものと覺悟致して居りましたが、國魂神龍世姫様ごやらの、厚き御守りに依つて大切な生命を救はれ、且ついろくの訓戒をうけました。それ故取る物も取敢ず、あなた様に御詫を申上げんと参りました。さうぞ此杖にて、私の身体を所かまはず、腹のいなる迄打据ゑ下さいませれば、罪の一部は購へられるものと心得ます。さうぞ宜しく御願ひ致します」

と熱涙を流し、真心より頼み入るのであつた。逃げ散つた數多の里人は、追々ど集まり來り、何れも一つの負傷もなきに、不審の思ひをし乍ら、會長の此態を見て、一同

は三人に向ひ手を合し、神の如く尊敬の意を表し、合掌して拜み倒して居る。

三人は三五教の教理を諄々と説き諭し、會長以下數十人に守られて數日の後、漸くキールの港に着いた。

(大正一一、八、八、舊六、一六、松村眞澄録)

第二章 サワラの都 (八三)

玉藻の山の聖場に
 三五教を開きたる
 世に聞わたる眞道彦
 救はむ爲に三五の
 集めて神軍組織なし
 寄せ来る敵を打拂ひ
 カールス王に疑はれ
 逃るる由も泣く計り
 遠き神代の昔より
 眞道の彦の末流と
 泰安城の急變を
 神の司や信徒を
 泰安城に現はれて
 遂には奇禍を蒙りて
 暗き牢獄に投げ込まれ
 ヤーチン姫も諸共に

聞くもいまはし冤罪に
 苦しき月日を送ります
 父を思ふの眞心に
 聖地を後にユリコ姫
 軽き姿に身を装ひ
 息もせき／＼辿り着き
 片方の岩に腰をかけ
 泰嶺山の聖地より
 後を尋ねて追ひ来る
 戀の纏れの糸をさき
 かかりて暗に呻吟し
 其惨狀を救はんぞ
 日楯、月鉦兩人は
 夜に紛れて蓑笠の
 アーリス山の頂きに
 月の光を浴び乍ら
 息を休むる折柄に
 神の司の月鉦が
 テーリン姫の執拗な
 言葉を盡して聖場に

歸らしめんと思へども
 戀に曇りしテーリンは
 とけば説く程もつれ來る
 時しもあれや木かきより
 現はれ出でし人影に
 一同驚き見廻せば
 思ひ掛けなきマリヤス姫の
 珍の命の出現に
 漸く急場を逃れ出で
 日楯、月鉾、ユリコ姫
 三人の司はやうくくに
 ヤツと蘇生の心地して
 アリス山を越へ
 須安の山脈打渡り
 夜を日についで漸々に
 テルナの里に辿りつき
 谷間にまたく一つ火を
 目あてに進む折柄に
 喉は渴き腹は飢ゑ
 根氣も盡きて三人は

とある木蔭に休らひつ
 幽かに漏れ來る人聲を
 耳をすまして聞き居れば
 俄に吹き來る谷の風
 三人の頭に何物か
 觸ると見れば木茄子の
 香りゆかしき果物に
 飛びつく計り喜びて
 忽ち三人は木茄子を
 一個も残らずむしり取り
 腹をふくらせ横はり
 いつしか眠りにつきにける。
 折も折じてバラモンの
 神の祭典の眞最中
 四五の土人は木茄子を
 神の御前に供へんと
 冠装束いかめしく
 幣振り乍ら進み來る
 素より三人は白河の
 夜船を操る眞最中

土人は忽ち木茄子の
 盗まれたるに肝潰し
 雷のやうなる罵聲
 テルナの里の酋長に
 時を移さず駈來り
 團栗眼を怒らせて
 生命に代へて守り居る
 取りて食ひし横道者
 奪ひて神の贄に
 罵りちらせばユリコ姫

一個も残らぬ何物にか
 明りに照して眺むれば
 驚き直に此由を
 報告すればゼトムスは
 三人の男女に打向ひ
 「テルナの里の人々が
 神に捧ぐる木茄子を
 汝三人の生命を
 奉らむ」と威丈高
 酋長の前に手をついて

「長途の旅に疲れ果て
 かゝる尊き果物と
 何卒深き此罪を
 我等を赦し給へかし」
 顔打眺め笑ひ顔
 容れて女房となるならば
 二人の男は如何しても
 尊き犠牲に供さねば
 覺悟せよや」と睨めつける
 詞を盡し身を盡し

喉は渴き腹は飢ゑ
 知らずにとつて食ひました
 廣き心に見直して
 願へば酋長はユリコ姫の
 「汝は我れの要求を
 汝の罪を赦すべし
 命を取つて神前の
 神の怒りを如何にせむ
 ユリコの姫はいろく」と
 口説き立つれば酋長は

漸く心和らぎて

苦しき荒行いろ／＼と

二人の男に言ひ付けて

漸く此場は鼻がつき

大祭壇の傍に

三人の男女を伴ひて

ユリコの姫には美はしき

衣服を與へ二人には

「猛火の中をくゞれよ」と

言葉厳しく下知すれば

日楯、月鉦兩人は

天津祝詞を奏上し

天の敷歌ひそ／＼と

小聲になりて稱へつつ

猛火の中を幾度も

いと易々と潜りぬけ

大祭壇の其前に

火傷もせずに歸り來る

並みゐる人々兩人が

其神力に驚きて

互に顔を見合せつ

舌巻き居たる折柄に

何處ともなく大火光

此場に忽ち落下して

會長ゼームス果敢なくも

身は中空に飛びあがり

行方も知らずなりにける。

並み居る數多の里人は

此爆發に驚きて

雲を霞と逃けて行く

逃げ遅れたる人々は

肝をば潰し腰抜かし

呻吟き苦む折柄に

ユリコの姫は會長に

與へられたる衣を脱ぎ

直に火中に投ずれば

日楯、月鉦兩人は

ユリコの姫の右左

立現はれて宣傳歌

聲も涼しく宣りつれば

醜の曲靈は何時しかに
 消え失せたるか風清く
 何とかなしに心地よく
 神の恵を三人が
 喜ぶ折しもゼームスは
 衣紋を整へ供人を
 數多引連れ珍らしき
 木の實を器に盛り乍ら
 三人が前に手をついて
 以前の無禮を心より
 詫入る姿の殊勝さよ
 茲に三人は三五の
 神の教を細々ぞ
 ゼームス始め里人に
 傳へて直ちに三五の
 教の柱をつき固め
 會長始め數十の
 里人達に送られて
 夜を日に繼いで高砂の
 北の端なるキールンの

漸く濱邊に着きにけり
 あゝ 惟神々々
 御靈幸はひまませよ。

* * * * *

常世の波も龍世姫
 高砂島の胞衣として
 神の造りし臺灣島
 木の實も豊に水清く
 禽獸虫魚も生ひたちて
 天與の樂土と聞わたる
 臺灣島の中心地
 玉藻の山の聖場を
 三人は後に立出で、
 艱難辛苦を嘗め乍ら
 テルナの里の會長に
 長き道程を守られて
 キールンの港に安着し
 船を庸ひて三人は

波のまに／＼漕ぎ出しぬ。折柄吹来る北風に

山なす浪は容赦なく 三人の船に衝き當る

ユリコの姫は船頭に 立ちて波をば静めつつ

神のまに／＼琉球の 八重山島を指して行く

やう／＼茲に三人は エルの港に安着し

岸邊に船をつなぎおき 聲名轟く照彦の

千代の住家と聞わたる サワラの都を指して行く。

サワラの都に、三人は漸く辿りついた。ここは際限もなき廣原の中央に築かれたる新都會にして、白楊樹の森四邊を包み、芭蕉の林は所々に點綴してゐる。國人は大抵芭蕉實、薺、林檎、木茄子、柿などを常食とし、或は山の芋、淡水魚などを副食物と

して生活を續けてゐる。

サワラの都には、廣大なる堀を以て四方を圍らしてゐる。其巾殆ど一丁計りの廣さである。東西南北に堅固なる橋梁を渡し、稍北方にサワラ的高峰、雲表に聳れ、四神相應の聖地と稱せられてゐる。城内には數百の人家立並び、今より三十年前の都會としては、最も大なるものと稱されて居た。サワラの城は殆ど其中心に宏大なる地域を構へ、石造の館高く老樹の上にぬき出て居る。城内には畑もあれば、川もあり、沼もあり、何一つ不自由なき様に作られてゐた。

三人は東の門より橋を渡つて、門内に進み入つた。黄紅白紫紺いろ／＼の花は木の枝に、草の先に爛熳と咲き亂れてゐる。又道の兩側には百日紅や日和花の類密生し、白き砂は日光に輝き、臺灣島の日月潭に比して、幾層倍とも知れぬ氣分のよき土地で